琉球大学学術リポジトリ

第15回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学 公開日: 2022-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学附属図書館編 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017803

第 15 回

びぶりお文学賞　受賞作品集

琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号　2021

2021

小説部門

かわく肌

葬ヤマメ

詩部門

胎児の唄

前川 真美

琉球大学

第 15 回

びぶりお文学賞　受賞作品集

琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号　2021

2021

小説部門

かわく肌

葬ヤマメ

詩部門

胎児の唄

前川 真美

琉球大学

第十五回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

第十五回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集　目次

小説部門受賞作
かわく肌　**葬　ヤマメ**
（沖縄国際大学 総合文化学部日本文化学科 四年）　6

小説部門佳作
邂逅 ｓｉｎｃｅ１９７２．　二藤
（沖縄国際大学 総合文化学部日本文化学科 二年）　44

電照菊と「闇」　羽影　憂
（琉球大学 人文社会学部琉球アジア文化学科 二年）　76

詩部門受賞作
胎児の唄　**前川　真美**
（琉球大学 国際地域創造学部国際地域創造学科 四年）　104

詩部門佳作
獣　葬　ヤマメ
（沖縄国際大学 総合文化学部日本文化学科 四年）　106

カルテ　綱取　汐音（琉球大学大学院　人文社会科学研究科　博士前期課程　一年）　110
盲目の巨人　天海　薫（琉球大学　理学部海洋自然科学科　二年）　114
友達と僕　宮里　うつ（琉球大学　人文社会学部人間社会学科　三年）　118
選評小説部門　122
選評詩部門　138
選考経過　145

琉球大学びぶりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己表現力を有する人材」育成の一環として、言語力（読む力、書く力）を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。第七回（平成二十五年度）から、応募資格が沖縄県内の大学生（高等専門学校の場合は本科四年次以上）及び大学院生に拡大されました。

装丁　阪田清子

小説部門

小説部門受賞作

かわく肌

葬　ヤマメ

ベランダに出て、小さなプランターの中で身を寄せ合うウィンターコスモスに少量の水をやる。手触りのよさそうな薄黄色の花弁を水滴が伝うと、沈みかけた残り僅かな西日がプランターを照らし、コスモスの控えめな華やかさをそっと際立てた。しばらくコスモスが風に揺られ踊る様子を見つめてから、鉢の底に溜まった土混じりの水を、ベランダの側溝に捨てる。サンダルの隙間から覗く皮膚から体温を奪われていく。足先の冷えに耐えかねて部屋に戻ると、玄関の鍵が開く音がした。

「ただいま」

コウキが玄関の扉を開き、部屋のどこかにいる私に声を掛ける。私は窓を閉めながら、

「おかえり」

と間延びした返事をした。窓の外でコスモスがかぶりを振って、花弁に溜まった水滴を濡れた土の上に落とした。

私とコウキは十九歳の頃から交際していて、三年前に挙式を挙げた。本格的に二人暮らしを始めて、今年で七年目になる。

都心部から離れたこのアパートは、やや手狭ではあるが閑静で住みやすい。なるべく実家から離れたいと、彼とともに数年前に移り住んだ。周囲には似たようなつくりのアパートが多く建ち並び、団地のような集合住宅地となっている。私たちは他県から移住してきた所謂「余所者」だが、近隣住民の大多数がそういった「余所者」らしく、厄介なトラブルとは無縁に過ごせている。

髪を結び直しながら彼に仕事はどうだったかと聞き、味噌汁の入った鍋に火をかける。彼は硬くなった手の骨をぽきぽきと鳴らしながら私の方を振り向き、

「今日は七本も書いた。ノルマが厳しいんだよね」

とばつが悪くなった子供のように頭をかいた。彼は広告ライターとしてＩＴ企業に勤めている。日々ノルマに追われる彼は、仕事は大変だよぉとはにかんで、立ったまま靴下を脱いだ。

階下から小さなスニーカーが力いっぱいコンクリートの廊下を蹴り、子供が走る音が聞こえてきた。アパート中に響くようなその音に思わず横目で彼の方を見たが、彼は夕方の料理番組を見ながらネクタイを外しているだけで、さしてその足音に興味を持っている様子は無かった。何の意味も無いが、その様子にほっと胸を撫でおろす。

私と彼の間に子供はいない。そして子供を持つ予定は今のところ無い。

私と彼は性行為を行わない。これは私の希望で交際当時に彼に提示したものだが、彼と婚約した日から、私の両手にはその残酷な確約が、大きな罪の意識として日々抱えられていた。

私が子供は持ちたくないと言ったとき、彼はそのことを了承してくれた。しかし歳を重ねるごとに私にはどうしても、こんなに残酷な提案を、生身の人間がすんなりと受け入れてくれる筈がないと思えて仕方がなかった。

本来なら、子供を持つことは夫婦の中で最上の幸福と捉えられている。また性行為は夫婦の中で大事なコミュニケーションとして扱われている。それらをすべて取り払った私の選択ひとつが、彼の人生の幾つもの選択肢の中に存在していた、「最上の幸福」を奪っている。そう自覚した瞬間から、私はまるで自らが、地獄の牢獄で刑を待つ罪人となったような気がした。しかしそんな罪の意識に苛まれてなお、本来は幸福と捉えられる〝子を成す行為〟が、私には苦痛で、恐ろしかった。

ある日の昼下がり、キッチンでコーヒーを淹れる彼の涼やかな横顔が、どうしようもなく悲しく見えた。私といる限り、彼は子を成すことを許されない。にわかに微笑む彼の口角に留まる諦めの予感を、私は見過ごすことが出来ずにいた。

夕飯をつくりながら、自然と包丁を握る手に力が籠る。そのとき決まって私はリビングを振り返る。バラエティ番組の賑やかな笑い声に紛れて、ソファに座りテレビを眺める彼の背中が、部屋の中心にぽつりと寂しく照らされている。その光景に私はたまらなく痛ましい気持ちになり、彼の前に平伏し、ごめんなさいと泣き縋りながら許しを請いたくなる。彼にとって、私は決して許されてはいけない罪人なのである。私が彼に子を成すことを許さないように。

向けようのない鬱憤は、手持ち無沙汰な私たちの間に常に漂っている。私たちは、まるでお互

い腫れ物に触るように穏やかに暮らしている。誤って口を滑らせると、たった二人だけで構築した奇妙な距離感が瞬く間に崩れてしまうことを、私たちは知っている。お互い血の滲むような我慢と沈黙で保ってきたこの幸福を失いたくない。明かりを消し、

「おやすみ」

と口に出せば、この幸福を失うことが如何に恐ろしいことなのかを実感する。私たちはいつまで、このきわめて穏やかな暮らしを継続することができるのだろうか。おそらく全て私次第なのだと、何となく予想はしているが、自覚したくはなかった。

「おはよう」

朝は緩慢に起きる。昨夜少しだけ開けていた窓から早朝の澄んだ空気が吹き込み、光を透かす薄いカーテンが揺れる。そのふやけた時間を静かで美しい日々だと私は毎朝思い、そして毎夜それを失う妄想に身悶える。

「おはよう。早いね」

「今日はちょっと会議があるから。帰りも遅いんだよね」

のんびりとした口調で彼が答え、欠伸をした。伸び上がった腕のしなりに合わせて、皺くちゃの寝巻きがぴんと張る。あぁ、と声を出して大きく開かれていた口が閉じ、綺麗に生え揃った歯

がかちりと噛み合って、彼が顔を洗いに洗面所へと歩いて行った。起きたての裸足の足音は微細な振動として部屋に鳴り、私はその音に耳を澄ます。この音から私の一日は始まっていく。

今日も何事もなく一日が終わるように、祈るような気持ちでこの音を聞く。そのうちにベランダのすぐ外側で雀が鳴き、数台の車が走る音が聞こえ出す。私は家中のカーテンを開け、部屋いっぱいに朝の光を受け入れる。そうしてコーヒーを沸かしにキッチンへと向かう。

遠くで路面電車が走り去ると、朝日に包まれた鉄塔が冷たく尖る。洗顔を終えた彼が、私の淹れたコーヒーに口を付けながら食卓へと座り、朝のニュースを流す。それを見届けてから、私も顔を洗いに、タオルを片手に洗面所へと向かった。

来週は祖母の三回忌だ。洗面所に向かいながら、リビングに貼られたカレンダーの紙面を思い出していた。

二年前、祖母が他界した。大往生だったため、通夜の夜、宴席の設けられた居間では親族の誰もが泣き笑いで祖母の思い出話をしていた。田舎町の夜は都会よりも深い。その日は街灯も無く薄暗い町の中、私たちの家だけが煌々と輝き、そして快活な笑い声が響いていた。

母や叔母たちの炊事の手伝いをし、すっかりくたびれて隣室の客間に設けられた座布団に座り込んで茶を飲んでいると、叔母がそっと寄ってきて、茶菓子を寄越してくれた。

「ヒナちゃん疲れたやろ？　あとアタシらがやっとくから、寝てえぇんよ」

叔母も急須で茶を注ぎながら、子供の頃の私にするのと同じ表情で優しく笑った。

「いや、えぇよ。私もやっと手伝える歳やし」
叔母と面と向かって話すのは久しぶりで、答えながらぎこちなく照れ笑いのような笑顔を浮かべてしまう。それでも叔母からすれば私は未だ幼い姪のままらしく、ぎこちなさも含めて、可愛らしい幼子でも見るように笑った。
色々な料理の匂いが染みついたカーディガンを脱ぎながら、まだ台所で何やら忙しなく動き回っている母の背中を覗き見た。あの子は働きもんやな、しょうのない子やほんま、と一緒に見ていた叔母が呆れて笑い、茶菓子を一口で頬張った。
「おばぁちゃん人気者やね」
賑やかな宴会の声を聞きながら、貰った茶菓子の封を切る。私の父が中心となって、祖母の思い出話に花が咲いているらしい。活け花の教室を開いていた祖母は、この地域のほとんどの人と顔見知りだったという。祖母を慕う人が大勢いることに父は嬉しそうだった。
「こんだけ仰山の人から好かれてたら、ばぁちゃんも成仏できるやろ」
声のする方を眺めながら、叔母が満足気に呟いた。宴会の開かれている部屋と違い、心許ない蛍光灯が弱々しく灯っているだけの客間はうっすらと寒い。しばらくぼうっと茶を啜っていると、畳の上に置いていた携帯が震えて、コウキからのメッセージ通知を表示した。どうやらもう寝るらしい。『明日の夕方には帰るよ。おやすみ』と返信し携帯を閉じると、湯呑を置いた叔母がエプロンを着直しているところだった。
「コウちゃん寂しがってへんか？」

私の右手に持たれた携帯を顎でしゃくりながら、叔母が尋ねる。正直あまり彼のことは話題に出さないでほしかった。そう思っていることを悟られないよう、つとめて平気そうに、

「子供やないんやから」

と呆れて笑って見せた。若干色の落ちた黄色いエプロンをした叔母は、何かまだ訊きたげな表情をしていたが、ずり落ちた長袖の袖を捲りながら、

「あんたのオカンの手伝いせなアカンわ」

と言い残し、部屋を出ていった。一人客間に残り、口内に残った茶菓子をぬるくなった茶で流し込みながら、叔母の何か言いたげな表情の意味を考えていた。苦みの強い茶がぼそぼそとした茶菓子を押し流し、強引に喉へと流れ落ちてゆく。酒に酔った父の声が徐々に大きくなって、家中にわんわんと響いた。

祖母の通夜には私だけで訪れた。母はコウキも連れておいで、と電話口で言っていたが、彼には来なくてもいいと伝えた。両親は私と彼が子供を持つことを望んでいる。彼を連れていくと、きっとその話題を持ち出されると予感したからだった。

私と彼は子を持たない。持てないわけではなく、私がそういう選択をしているからだ。しかし両親は、その選択という〝間違い〟をどうしても正したいらしい。これまで帰省のたび、考え直したらどうだと何度も説得された。子供の話をされると、コウキは一度ぎゅっと強く瞬きをして、曖昧にはにかむ。その表情を見ると、心臓が不気味な寒さに包まれて、わぁっと叫び出したくなる。

ジ、と音がして頭上を見上げると、一匹の蛾が蛍光灯にぶつかり、その身を焦がしていた。畳

の上に蛾の影が大きく膨らんで揺らめく。それをじっと眺めていると、縁側からひときわ賑やかな声が聞こえた。立ち上がって見に行くと、遠方から従兄夫婦が寄ったらしく、妻の方がつやつやとした寝顔の幼児を抱いていた。
「大きなったなぁ、いま何歳や？」
「まだ2歳や」
「おぉ、ほなもう喋るかぁ」
先ほどまで酩酊し大声で話していた父も、小さな声で嬉しそうに子供の寝顔を覗き込んでいる。空港から向かう途中の車内で寝てしまったらしいが、顔だけは見せに来たと言いながら、従兄が幼児の丸い額を撫でる。一切の脂っ気のないさらさらとした細い髪がつややかに流れ、無垢な寝顔を蛍光灯の明かりの下にさらけ出した。産まれて日の浅い子供には生活のシミが無い。人間らしいくすみが一つも無い肌や目鼻立ちからは、男女の判別ができなかった。
「全然起きひんな」
いつの間にか宴席に混じった母が、よう寝てはる、と幼児の頭を撫でながら笑う。すると眠り込んだ幼児が嬉しそうにふにゃふにゃと笑った。寝惚けて自身の母親の手と間違えたのだろうが、それでも私の母はまるで自身の孫がはじめて立ったかのように目をぎょっと瞠目させ、そしてすぐに花が綻ぶような笑顔になり、
「おばちゃんに撫でられて笑うてはるわ」
と普段より幾分か甘ったるい声で喜んだ。気が付くと親戚一同が眠る幼児に群がり、慈愛の表

情を浮かべながらその寝顔を眺め、お互い小声で笑い合っていた。
私は宴会場の入り口に立ち尽くし、その様子を呆けた顔で眺めていた。眠る幼児に甘ったるい視線を注ぐ父も母も、どこか寂し気に空いた穴を埋めたがっているように感じた。その穴は本来、私とコウキが埋めてやれるはずの、暗く深すぎる穴だ。
幼児は大勢の大人に囲まれてなお、無邪気な寝息を立てている。私が産む子は、あれほど安らかな寝息を立てて眠るだろうか。ぷくぷくとした頬を綻ばせ、ふやけたように笑うのだろうか。
産まれる筈のない我が子のことを考えると、顔も知らぬ赤子が、未だ生え揃わない産毛を風に靡かせ、私を睨み付けている気がした。

小さく切り揃えたブロッコリーを弁当箱に詰めながら、カレンダーの紙面をなぞるように思い描いていくと、ちょうど今日の日付欄にマークがされていたことを思い出した。
二日ほど前、懐かしいアイコンのアドレスから、久ぶりに会わないかと連絡がきた。私はそのアドレスを見たとき、テレビを見る彼の隣で、動転した気持ちを隠しながらメッセージを読んだ。『ユウ』と表示された名前には、懐かしさと共に、微かに色づいた学生時代の記憶が蘇る。

ユウと私は高校一年生の頃、同じクラスだった。出席番号が近く、新学期初日の掃除の割り振りで同じ班になり、お互いぎこちなく自己紹介をし合ったことをよく覚えている。彼女が笑うと、目にわずかにかかった黒髪に、目尻の泣きぼくろがそっと触れる。大人しく柔和な雰囲気を持つ

彼女とはすぐに気が合い、私たちは一緒に行動するようになった。
しかし二年生に上がり、私たちは別々のクラスになってしまった。それをきっかけに、彼女と一緒にいる時間が減っていった。勿論、クラスの区別なく学年で動くような体育祭や学園祭などで一緒になると話すことはあった。しかしそれ以外の移動教室や休み時間の間などは、二年生になり新しくできた友人と行動を共にしていた。そういった一年間の空白のせいか、彼女と私は自然と疎遠になった。
三年生になり、再び彼女と同じクラスになった。しかし思春期の不器用な私たちは、すっかり互いの友情を見失い、少女らしく恥じらいながら見て見ぬふりをするように、互いが新しく構築した友人関係の輪の中で微睡んでいた。青春時代は春風のように瞬く間に過ぎ去る。このまま卒業へと向かうと私が確信していたとき、修学旅行という期待に胸躍るようなイベントが訪れた。
そこで私と彼女は同じ班になった。修学旅行の前日、ルートを決めるために集まった顔触れの中にいる彼女と目が合い、私はそっと、新学期初日に初めて彼女と出会った日のことを思い出した。目が合った彼女は気恥ずかしそうに微笑んだだけだったが、きっと同じことを思い出しているに違いないと思った。
修学旅行はとても楽しかった。行ったこともないような大きな遊園地や見慣れない都会に、私たちは受験勉強のことも忘れて羽を伸ばした。彼女と私の間に空いた溝も、未知の楽しさの前では無意味だった。私は一年ぶりに、彼女の弾けるような笑顔を見た。
三泊四日の旅はすぐに終わりを迎え、最終日の夜は銘々切なさを抱きながら暮れていった。教

員が部屋に訪れて消灯し、私たちは眠りに就けないまま暗闇の中で語り合った。話題はいつの間にか女子高生らしい恋の話になり、私たちは顔を寄せ合い、秘密裏に育まれている恋の話に興じた。

やがてそれらにも飽きて、徐々に周囲が眠りに落ち始めた頃、退屈さを感じて隣を見ると、布団に寝そべったユウと目が合った。私は彼女に何となく、想い人はいないのかと訊いた。彼女はしばらく渋っていたが、私がしつこく食い下がると一瞬何かを思案するような表情を浮かべ、枕を両腕で抱きかかえるように寄せながら、

「私は、ヒナが好き」

と消え入りそうな声で呟いた。彼女の顔は血が滾るように赤く染まり、震える手は枕が破けてしまうのではないかと思うほど握りしめられていた。思わぬ告白をされた私は動揺して、布団に包まり眠る周囲の級友たちを見回した。今になって思い出すと、私のこの行為は無意識の偏見に満ちた恥ずべき行動だと思う。しかし無知だった私は、彼女の血を吐くような決死の告白より、誰かに聞かれていやしないかという恐れの方が勝っていた。

幸い、私と彼女以外の皆は疲れて眠ってしまっていた。ほっとすると同時に、彼女の好意が友人同士の好きではないという事実に混乱する。耳がかっと熱くなって、初めて同性から向けられる性愛の欲求に、無言のままひたすら汗を流していた。

彼女はしばらく薄目を開けるように慎重に私を見つめていたが、私が呟いた、

「ごめん」

という言葉に、切ない表情を浮かべた。そして枕から手を離し、布団に頭まで包まりながら、「私こそごめんね。もう寝よ」

とくぐもった声で呟いた。私はぎくしゃくとそれに返事をして、彼女に背を向けて必死に目を瞑った。重たくて嗅ぎ慣れない香りのする布団の中、級友たちの静かな寝息を聞きながら、眠ることもできずに朝を迎えた。

翌朝に楽しい旅は終わりを告げ、私たちはバスに乗り、学校へと向かっていた。私はバスの車窓から流れる景色を眺めながら、昨夜の告白について考えていた。暗がりで見た彼女の表情は酷く哀れで、すぐに布団に隠れて見えなくなってしまった潤んだ瞳を、何度も思い出していた。

通路を挟んで向こう側の窓際の席で眠る、彼女の横顔を幾度となく盗み見た。あどけない寝顔は何の変りもなく、私は昨日の出来事は夢だったのではないかとさえ思えた。

それ以降私たちは特に会話もなく卒業の日を迎えた。卒業式当日、私たちは何度か視線を交わしながらも、抱えた花束に隠れるようにして表情をぼかし、誤魔化し合った。それが彼女と私の最後の思い出だった。

彼女は成人式には来なかった為、この連絡はまさに青天の霹靂だった。弁当箱の蓋を閉じ、タオルで手の水気を拭いながらカレンダーを見る。記憶の通りに、今日の日付欄に黒いマジックで「ユウと会う　十五時」と簡素に書かれていた。

コウキが新聞を畳み、ハンガーに掛けられていた紺のスーツに袖を通す。それに合わせて食卓

の皿を流しに下げながら、彼の弁当箱が入ったポーチを開き、箸や保冷剤の入れ忘れはないか再度確認する。
「今日友達と会うんだっけ？　夕飯外で食べてこようか？」
コウキが首を伸ばし、カレンダーの方向を見つめながら言う。私は流しに薄く残った茶の濁りを流水で押し流しながら、大丈夫だからと笑った。
干したての靴下をきちんと履いた彼が、テーブルの上の鞄を開ける。私はそこに丁寧に弁当箱を仕舞い、鞄を閉じた。
「今日会う子、成人式来なかったんだよね。顔とか全然覚えてないかも」
「そんなもんだよ高校なんて。俺も高校の友達ほとんど覚えてないなぁ」
綺麗に磨かれた革靴を玄関に並べた。コウキの大きな足がその中にすっぽりと収まり、普段の彼とは見違えるような大人びた顔をする。他人の彼が完成すると、朝のふやけた時間はここで終わる。
「じゃあ今日は、お友達によろしくね」
笑顔のまま私の方へ向き直った彼が柔く両腕を広げた。私はその腕の間に身体をすり寄せ、彼の背中の、紺のスーツのつるつるとした手触りを無言で感じる。抱き合ったまま私は彼の右耳に頬を寄せ、耳朶のわずかな冷たさと人肌の温もりを皮膚で味わう。
「行ってきます」
「行ってらっしゃい」

スーツの手触りが名残惜しそうに指先を離れ、彼の耳朶の冷たさだけが、私の頬に痕として残った。彼を見送るとき、一抹の寂しさと共に、肩の荷が下りるような軽やかな浮遊感を感じる。

玄関扉が開かれて、朝の澄んだ風が私の足に届き、裸足の爪先を縮こまらせた。じゃあ、と軽く手を上げた彼に手を振る。幼い笑顔を見せる私を残して扉が閉ざされ、再び部屋に静寂が落ちた。そのままキッチンへ行き、ゆっくりと紅茶を入れる。セイロンの茶葉が浮かぶガラスのティーポットを見つめながら、今日着る服のことを考えた。二十代も後半になった級友に会うには、派手過ぎず、年相応に落ち着きも取り入れた服が最適だろう。そう思案して茶を飲み干す。十時過ぎには、クリーニングに出していた喪服を取りに行かなければならない。

来週の祖母の三回忌、父と母はまた、コウキも連れて、と言い出すだろう。私は今回も一人で行くつもりだ。私はまだ、通夜の夜に見た幼児の顔が忘れられないでいる。人々の笑顔の下で眠る幼児の丸い額と、私の立っていた薄暗い入口の切なさを思い出す。幼児はまるで人々に幸福をもたらす天使のようだった。それを代わる代わる覗き込む輪に入れない私に、天使はつくれないだろう。

金色の茶葉が熱で浮遊する。ティーポットが窓から差し込む光に包まれ、ランタンのようにぼうと光った。その輝きが、修学旅行の夜に見たユウの瞳と重なる。私は彼女がどうして今更、私に会おうと思ったのかを知りたかった。

クリーニング屋で受け取った喪服は、見知らぬ土地の真新しい空気のような、ほのかなアイロンの香りを残していた。ビニール袋にすっぽりと覆われた服は、まだ陽の高い午前の陽光を受けてなお、黒々と輝いている。まるでネガティヴの象徴だと思った。子供の頃は喪服なんて持っていないから、学校の式典で着用する式服でよかった。昔、遠い親戚の葬儀に参列した思い出が記憶の片隅に残る。

喪服の大人に囲まれ、白いワンピースを着た私だけが、華やかな色を纏っていた。喪に服す、という言葉も感覚も知らない幼い私は、式服を着る日は普段とは違うおめかしという、少女らしいほのかな喜びだけがあった。

葬儀の朝、学校へ公欠の連絡を入れた母が、丁寧にアイロンをかけた、糊の利いた真っ白なワンピースを着つけてくれる。普段より少し忙しない両親が着せてくれる、非日常の香りのする式服が好きだった。

顔もよく覚えていない親戚の葬儀は、子供にとっては退屈なイベントの一つでしかない。人の死というものを目の当たりにしたことがない子供からして見れば、式典と葬儀の違いは些末なものだ。学校の式典のときと異なり、胸ポケットに挿される祖母のコサージュが無い。幼い私にとって、式典と葬儀の違いはそれだけだった。

未だ明確な死を知らない子供の頃、無邪気な無知に守られていたと、今なら思える。午前の街は人通りが少なく、ようやく開き始めたスーパーが必要以上に大きなＢＧＭを流していた。

自宅に戻ると、ビニール袋に包まれたままの喪服をすぐにタンスに仕舞い、夜間に帰ってくる

であろうコウキの為に作り置きをしておこうと、冷蔵庫を開けた。温めやすく日持ちするカレーにしようと、冷蔵庫をぼんやりと眺めながら考える。

玉葱と人参、じゃがいもの袋を取り出し、カレールウの仕舞われていた棚を開きながら、点けっぱなしになっていたテレビから流れるワイドショーの音だけに耳を澄ます。名前を憶えていないコメンテーターが何やら発言し、無意味な論争を繰り広げている。それを聞きながらじゃがいもの泥臭い皮を削ぎ落すとき、午後に差し掛かる時間特有の、なめらかな眠気に全身が包まれる。

野菜を炒める心地よい音の隙間に、ゆったりとしたコマーシャルの音楽が混ざった。そろそろ実家の母から電話が掛かってくる頃だろう。来週は何時に来るの、とメールで済むことをわざわざ電話で尋ねる母に、年相応の老いを感じる。

私には両親がいるが、コウキには幼い頃から母親がいない。彼が幼稚園に上がる前に家を出て行って、それきりらしい。以来父親と二人きりで暮らしてきたが、そんな父親も数年前、癌で他界してしまった。父親の遺言で葬儀は手短に済ませたが、葬儀の間、時おり彼は、本来母親が座るはずの椅子を無言で眺めていた。私は彼の母の代わりにそこに腰掛け、蒼ざめて黙りこくったまま、彼の視線を感じていた。コウキの父は寡黙で、私たちが子供を持たないと言っても、そうか、と一言呟くだけで、それ以上は何も言ってこなかった。私にはその無言の横顔が、どんな罵詈雑言よりも恐ろしかった。存在しない母の面影を探すコウキの視線には、その沈黙の恐ろしさの片鱗が燃えている気がした。喪服の黒々とした光沢のなかに、コウキと、コウキの父の静かな視線がこびり付いたままでいる。

軽い入浴を済ませたあと、ダイニングのテーブルに「カレーあるよ　食べてね」と書置きを残し、身支度を整え玄関へ向かった。窓を閉め切った部屋はしんとして、リビングでは私の残滓のように、微かに埃が舞っている。扉を開くと埃は煙のように揺らめいて渦巻き、消えた。

夕暮れが訪れようとしている街は薄く白み、雲の無い冬空を高く広げている。外は陽が落ちてきて肌寒さが増していた。

帰宅者や買い物客がちらほらと歩いている駅の構内は、独特な他人の香りがする。季節のファッションもあるだろうが、すれ違う人々はみな一様に灰色に見える。駅構内の簡素なつくりも相まって、人々の足並みは大きな灰色の波のように流れている。

切符を買い、ホームから見える縦長の空を眺めた。遠くの方から夕陽に焼かれていく空は硬く身を強張らせ、徐々にその表情を変えつつある。私は確かに、その空の中にわずかな郷愁のようなものを感じていた。

待ち合わせ場所で所在なく立ち尽くす。駅前の広場は冬らしくイルミネーションで飾り付けられ、昼間なのにびかびかと光る明かりの中は、何となく居心地が悪かった。数分ほど携帯を眺め時間を潰していると、背後からふいに声を掛けられた。

「久しぶり」

振り返ると、嬉しそうに微笑んだ女性が立っていた。暖かそうな黒のアウターに身を包んだ彼女は、清楚でさっぱりとした薄化粧をしている。私は彼女の涼やかな目尻にぽつりと落ちる黒子を見つめていた。面影の残るぱっちりと開いた目が細められ、つられて目尻の泣きぼくろが、長い睫毛に触れそうなほどきゅっと上にあがった。

「元気だった？」

数年ぶりに会うユウは、見違えるほど大人びていた。

私は彼女の湯上りのような湿度を含んだ張りのある肌に目をやった。学生時代の大人しさの面影はありつつも、きめの細かい肌にしっとりとした大人の妖艶さが滲んでいる。

「うん、久しぶり。元気だよ。ユウは？」

私と彼女は、初めて会ったときのようにぎこちなく笑い合った。彼女の笑顔を見るたびに、私の記憶の中で止まっていた彼女の姿に動きが蘇っていく。私はその笑顔に安心しつつも、彼女が今日私と会おうと思った真意を訊くときを、今か今かと伺っていた。

ユウの勧めで駅前に新しくできたばかりの喫茶店に入る。店内はブラウンを基調とした落ち着いた雰囲気で、暖色の照明がぼんやりと温かさを演出している。ゆったりとした革張りのソファに腰掛けて、私たちはしばらく、思い出話に花を咲かせた。学内で起こった出来事や一年生の頃に共に過ごした日々を振り返り、まるで年老いた夫婦のように、記憶の煌めきを懐かしく眺めた。

彼女が運ばれてきたカクテルを手に取る。そのほっそりとした指には何の装飾も無い。私は何となく、彼女に結婚したことを言い出したくなかった。そう思った私の中にどのような思惑が

あるのか、私ですら分からなかった。頬杖をついた私の頬の傍で、銀色の輪がぎらぎらと光る。彼女がそれを見ていることに気が付かないふりをしながら、私は高校時代の思い出をまとめた携帯のアルバムをスワイプしていた。液晶の中で顔を寄せ合って笑う私たちは、もう二度と取り戻せない青春の無邪気さを留めている。私が何かを言おうとして顔を上げたとき、指輪に彼女の顔が歪んで映り込んだ。銀のリングの中でぐにゃりと歪んだ彼女は、何かを決意したような顔をしている。私はその表情を、修学旅行の夜に見た記憶があった。

「結婚おめでとう」

指輪を嵌めた私の薬指を指さして、彼女が祝福する。その笑顔は、先ほどまであった何かを決意するような思いつめた陰りを巧妙に隠していた。素直な感謝が言えず、私は一瞬、目線を逸らしながら唾を飲んだ。笑顔であるが彼女の頬は固く、細められた瞳の奥に滲む密やかな悲しみを見て取れた。店内のどこかで鳴る硝子の擦れ合う音が鮮明に聞こえる。卒業式の日、祝福の言葉を互いに言いそびれてしまったことを、私は激しく後悔した。私は彼女に、なるべく自然に見えるように微笑んだ。ありがとう、と口に出してはみたが、上手く言えた自信は無かった。

彼女は苦しそうに、しかしそれでいて微かに嬉しそうに、私の指輪の輝きを眺めた。私はその憂いのある笑みから視線を外し、テーブルの上で細かな泡を立ち上らせる桃色のカクテルを眺めながら、あの修学旅行の夜の、若気の夢のようになってしまった告白の言葉を蘇らせていた。

未だに思い出すと胸が仄かに熱くなり、あのとき恐れをなして逃げてしまった、熱に浮かされるような不安定な恋愛の予感を燻ぶらせる。血を吐くような告白をしていてなお、彼女は私の結

婚を祝福できた。その美しいまでの慈愛に、私は何となく、私自身の何か重要な隙のようなものを曝け出してやりたいと思った。
「私、彼とセックスしたこと無い」
私は罪を告白するような面持ちで、彼女の目を見つめた。他人に見せることの無い部分を曝している羞恥に襲われて、私の心臓が高鳴っていく。私たちの間に繋がっていく細い一本の糸を、私の目ははっきりと捉えた。彼女は少し驚いたように硬直して私の方を見ていたが、暫くして、
「どうして」
と唇を震わせた。私は何かもう後には引けないような、分岐点に差し掛かっている。
「子供は持たないって決めたから」
そう言いながら私は高校時代に感じた、あの身体が燃えるほど熱くなる恋愛の予感の端を、掴んでしまったような感触を得た。
「そっか」
と彼女が吐息交じりに返事をした。どこか遠くを見てぼんやりとしていた彼女の黒目と、私の視線が交わる。途端、彼女の透き通った瞳は私の目をしっかりと捉え、何かを逃すまいとする飢えた熱を浮かべた。
「ヒナ、私と一緒に遠くに行かない?」
そう告げる彼女の唇は、まだ僅かに震えていた。私から逸らすことの無い大きな二つの目が、請うような、食らいつくような獰猛さを宿す。その熱を感じ取った心臓が、徐々に拍動を早くし

ていく。私には彼女の真意が確実に見て取れた。視界が陽炎のように歪み、心音が激しく身体を揺するのを感じる。私は彼女と繋がってしまった一本の糸を手にしながら、久しく他人から向けられる、刺すような性の欲求を強く意識していた。

二度と使われることはないと思っていた、脳の得体の知れない部分が、喜びに打ち震えるのが分かる。顔中に血液が集まっているような熱い漲りがとめどなく続き、予定通りに訪れた混乱の最中、彼女の引き結ばれた唇を見た。震えを隠すことのできない唇が、照明を照り返して怪しげに光って見える。私は唾液の分泌され続ける舌の震えに従うように、

「うん」

と小さく頷いた。どくどくと鼓膜の傍で鳴る血液の音を遮るように、彼女がぎこちなく笑った。返事を返した私の声は、学生時代よりもわずかに低くなったような気がした。

部屋に帰り、しばらく放心したようにリビングのソファに腰掛けていたが、アパート前を走り去る救急車の音で我に返り、携帯に表示されたままのユウの連絡先を眺める。アイコンの彼女は華奢な身体を傾け、三日月のように目を細めている。

この幸福は全て私次第なのだという予感が、確信に変わり始める。窓の外で荒ぶったように激しく揺れるコスモスが、纏わりつく水を毛嫌いするかのように弾き落とした。

この部屋から私は逃避する。情けなく荷物を纏めて、彼の顔も見ぬまま。あれほど躍起になって守っていた幸福を自らの手で棄てているというのに、私の心臓は不気味に高鳴っていた。唾液が不自然に分泌され、瞬きを何度もする。私は逃げる、口の中で再びそう呟くと、子供の頃に感じた熱っぽい高揚感が奥底から湧き上がってくるような気がした。

秘密の共有というものはとても甘美な娯楽だ。子供の頃、両親に内緒で家の裏庭に秘密基地をつくったことを思い出した。

夏が近づくと庭先に深く柔らかい低木の香りが漂い始める。活け花をする祖母が植えたものだった。低木は時期になると白く小ぶりな花が咲き、クリーム色の斑が混じった淡い葉がこんもりと茂る。その華奢な枝葉を押しのけると、小さな洞穴のようになる。私は家族が目を離した隙にそこに潜り込み、木の実を使ったままごとや、うたた寝をしていた。

鼻先を擽る花弁の香りは、幼い私にとって秘密の香りだった。誰も知る由の無い、私だけが居ることを許される空間。あの庭に悪戯っぽい小さな洞穴があることは、両親にも祖母にも内緒だった。

私は今から、新たな秘密をつくる。夜逃げのように荷物を纏め、一番お気に入りの服を着て、何かから逃げ出すかの如く部屋を飛び出した。去年旅行用に買った黒いキャリーケースに貼られた、私と彼の名前が刻まれたホログラムのステッカーが、街灯の明かりを受けて恐ろし気に光った。

信号待ちの間、私は彼と暮らしていくはずだった素朴なアパートを見上げた。下から見るとど

の部屋も同じ作りで、どこが私たちの部屋なのか明確には分からない。それでも私はわずかな後悔と贖罪の気持ちを込めて、そのアパートを見つめた。あのベランダで身を寄せ合うコスモスたちに、彼は一人、水をあげるのだろうか。私は寒空の下で水を待つウィンターコスモスの淡い色合いを思い出していた。

駅でユウを待つ間、もし彼女がここに現れなかったら、まだ引き返せると何度も思った。寒さが肌を刺すたび、どっちつかずで優柔不断な期待を膨らませていたが、定刻通りに彼女はやってきた。私は向こう側から此方へやってくる、彼女の身体の輪郭を目でなぞりながら、複雑な胸中を掻き立てられていた。

「おまたせ」

少し鼻先を赤くした彼女が目を細める。その表情や足取りはどこか晴れやかで、嬉しそうに見える。私は不安な心境のまま、彼女に笑顔を返した。

「行こ」

彼女が荷物を持っていない方の手で私の手を握る。高校一年生の頃、私が遅刻した日は決まって校門前に彼女が居て、行こうと呼びかけながら私の手を引いて走ってくれていた。久しく握る掌は柔らかく、少し大きくなっていた。帰宅時の人で溢れる駅の構内で、私はその温かな手を握

り返し、母に連れられる子のように従順に、彼女の後についていった。
［快速］と表示された電車の扉が閉まり、私と彼女は並んで長椅子に腰掛ける。暖房の効いた車内は他人の香りを熱でコーティングし閉じ込める。胃の中がむっとするような香りに耐えながら、私たちはいつまでも手を繋いでいた。駅名標がいくつも流れ、私と彼女の掌の中に、じっとりと汗が滲んでいく。斜め前で吊革を掴み立っている若い男が、何度か私たちの繋がれた手をじっと見て、何かを思案しているような面持ちをしていた。
ホームに一歩降り立つと、熱の籠った嫌な空気から解放された肺が、冷えた空気を目一杯取り込む。水っぽい香りに鼻の奥がつんとして、私は目頭を熱くした。
「これからどこ行くの？」
私は彼女の弾む横顔を見ながら尋ねる。彼女は私の手を離しながら足を止め、携帯で表示した民宿のような小さなホテルを見せながら、ここに泊まりたいと言った。こぢんまりとした見た目は年月を感じさせる色合いをしている。彼女はこの古さだと安いからという理由ではにかんでいた。
眠気を含んだ薄曇りの空は重たく影を落とし、町に一層寒さをもたらす。寒さをやり過ごすように連れ立ってホームを出ると、街灯がぽつぽつと立つ、黒く湿った駐車場が広がっている。
「タクシー乗ろっか」
ユウが迷いの無い足取りでタクシー乗り場へと歩き出す。雨露に濡れた駐車場にはタクシーが何台も停車し、白い車体を光らせて、まるで喪に服すように客の訪れを待っていた。その白と黒

の境目は等間隔に並び、鯨幕のようにも見える。
「寒いね」
彼女の背中を追いながら、白く強張った手の甲を擦る。寒さで青い血管が何本も浮き出て骨ばった手は、列車から持ち出した僅かな温もりをすぐに手放す。消えかかった白線を踏み歩きながら、最後尾に停まっていた冴えない運転手の待つタクシーに乗車した。
トランクにキャリーケースを押し込み、タクシーがとろとろと走り出す。[空車]と赤く光っていた電光が[賃走]に変わる。運転手は何か気の利いたことを言おうとして話しかけてくるが、本来は口下手なのか、すぐに口を噤んでしまった。
ユウは車窓から見える街角の飲食店を何軒か指さし、行ってみたいと笑っていた。その背後でパチンコ店の電光が派手に光る。私たちを乗せた白い車体は霊柩車のような面持ちで街を這っていく。
「着きましたよ」
途中から私と彼女の会話に聞き耳を立てるだけになった口下手な運転手が、おずおずと振り返り到着を告げる。私たちは料金を払ってタクシーを降り、トランクからぶつけぬよう、そっと荷物を取り出した。

そこから何度か電車を乗り換え、陽が落ち始めた頃、岡山の倉敷市まで来た。「水島臨海鉄道のりば」と看板を掲げる駅は、駅というより役場のような門構えをしている。入口の上に乗っかった巨大な立体駐車場を見上げながら駅構内に入ると、薄暗い構内の中、定期券の窓口が緑がかったライトをぼんやりと光らせている。私たちは並んで乗車券を買い、ホームに備えられたプラスチックの椅子に腰かけ、列車を待った。

出発までの間、彼女は近況やこれまでの生活のことを色々と話してくれた。高校卒業とともに実家を離れ、一人暮らしをしながら他県の文系の大学に通っていたらしい。卒業後は書店で正社員として働いていたが、半年前に退社した。現在は転職活動中だと話す彼女の目元は涼やかに澄んで、希望と喜びに満ち溢れた輝きを灯している。

ざぁとノイズのような風が吹いて、赤色のレトロな電車がホームに滑り込んできた。私と彼女はそれに乗り、長椅子ではなく、対面式の席に向かい合って座る。行き先を告げた列車が走り出す。ホームの薄明りを抜けた列車は、左右に広がる街の明かりを切り裂くように、淡い夜の線路を駆けた。列車のすぐ隣を長い貨物車が追い抜き、鉄の軋む音を残像のように残す。私はもうじき家に帰るであろうコウキの姿を思い浮かべながら、徐々に減っていく街の明かりを数えていた。

そんな私の空想を知らないユウは、携帯でこれから向かうホテルの内装を私に見せ、

「すごい古い」

と笑っていた。

列車は各駅に律義に停まりながら、街中、陸橋、田園と、その風景をゆるやかに変えていく。

何度も通り過ぎる家々の明かりを見るたびに、私はコウキの姿を思い浮かべ、忘れようと首を振った。

景色が見慣れた街明かりから、無機質な鉄の工場に変わった頃、彼女に手を引かれて列車を降りた。左右に幾つもそびえる工場が、夜風の中で得体の知れない生物のようにじっとしている。雨が降る気配がして、私たちは足早にホテルへ向かうことにした。カーブミラーに映った私たちが、キャリーケースを引きずって鏡の中から消える。携帯で地図を見ながら何度も角を曲がる私たちは、どこか窮屈なところから逃亡してきた旅人のような影を並べた。

「ここだ」

彼女の声で見上げると、海沿いから少し離れた位置に建つ小さなホテルが目の前にあった。彼女が列車の中で見せた写真の通り、ホテルはモルタルの壁を侵食されるように蔦に覆われ、辛うじて覗けた電光看板が「ホテル　ニューみずしま」と弱々しく光っていた。

「すごい見た目だね」

思わず呟き、彼女と目を見合わせて笑い合う。深緑の葉に覆われるホテルは、今にも葉の中にすべて取り込まれて消失してしまいそうな外観をしていた。

がたん、と音を立てて開く自動ドアを抜けると、場末のパブのような埃臭い匂いが鼻を衝いた。橙色の照明の点くフロントは妙にだだっ広く、古ぼけた赤いベルベットのソファが幾つか無造作に置かれている。埃っぽい椅子に誰かが腰掛けていた形跡は無い。ユウがフロントに名前を伝えると、少々お待ちくださいと不愛想に告げたフロントスタッフが奥に引っ込み、「３０５」と刻

印されたホテルキーを手に戻ってきた。安っぽいアクリルキーホルダーのぶら下がるキーを受け取り、くすんだ黄緑色をしたエレベーターに乗る。ごん、と音がして扉が閉じ、上昇するエレベーター内にじんわりと煙草のヤニのような閉塞的な香りが充満した。

「飲み物買ってくるの忘れた」

ユウがしまった、という表情のまま、背面に設置された鏡で前髪を直している。足元に敷かれた深紅のカーペットは、廊下と同じように毛羽立って汚れていた。

部屋に着いた私たちは、それぞれの荷物を適当なところに置き、疲れた身体を投げ出すようにベッドに倒れた。

「あぁ疲れた。寒いね」

そう言うとユウが上半身だけを起こして、窓の外の景色を眺めた。雨の予感は小雨に変わり、しとしとと窓を濡らしていた。見知らぬ街は冬の色を濃く落とし、まるで映画のように他人事の営みを続けている。私と彼女の営みも他人事の一部でしかないと思うと、何だか途端にすべてが些末なことのように感じられた。

部屋はところどころが時代錯誤な色合いや造りをしているとは言え、外観やフロントと比べれば、何とかまともな体裁を保っていると言えた。大きくてゆったりとしたダブルベッドは柔らかく沈み、心地よい。

「部屋は綺麗だね」

彼女が緑色の四角い冷蔵庫を覗き込みながら頷く。

「ねぇヒナ、アイスがある」
笑い交じりに声を上げたユウが、可愛らしい冷蔵庫からおもちゃのように小さなアイスクリームのカップを取り出した。一緒に冷やされていたであろうプラスチックのスプーンが、小さな霜に濡れている。
「冬なのに」
「常備されてるんだよ多分。私バニラがいい」
暖房の中で食べるアイスクリームには、特別な高級感がある。バニラ味の方を受け取って蓋を開くと、清涼感のある香りが漂った。平らに均された表面は、どこか雪原を思わせる。
透明なプラスチックのスプーンが折れそうなほど撓みながらゆっくりと沈み込み、大きな一塊を乗せて、口元へと運ばれる。たったそれだけで、容器の三分の一ほどの面積が無くなってしまった。
「ケチだねこのホテルは」
ユウが小さなアイスクリームをすぐに食べ終わり、物足りなさそうに再び冷蔵庫を開けたが、もうそこには何も入っていなかった。
空になった容器を棄てようとしたとき、傾けた容器の底にしつこく残っていたバニラ色の液が、私の手の甲にべっとりと垂れた。
「うわ、垂れてきた」
手の甲を流れ落ちようとするアイスのかけらを反射的に舐め取る。体温で液状化し始めている

アイスが舌先に触れて、ぬるい甘みが粘っこく張り付く。
指の隙間に舌を這わせて甘い液を舐め上げたとき、ふとこちらを見るユウの視線に気が付いた。彼女は私の舌先を注視している。その視線に含まれる熱っぽい何かを、私は感じ取っていた。
彼女がふいにベッドから手を伸ばし、私が棄てそびれた空の容器を摘まみ上げ、棄てた。湿りを帯びて柔くなった紙の容器は静かにひしゃげて、まだ何も入っていないゴミ箱の中に落ちた。その指先がやけに艶めかしく硝子に映る。私は彼女のしなやかな指先を硝子越しに眺めていた。
きっとこれが何かの合図だと、私は直感的に感じた。揺れ動く彼女の指先がそっと照明を落とす。私たちはどちらともなく服を脱ぎ、寝具へと腰を下ろした。
薄紅のランプの下に散る私たちの下着が、暗く色付いて沈む。白いシーツは光を受けて波のように撓み、私とユウの視線を包み込む。
何かを促すように私を見上げる視線に応じて、私はその肌に舌を這わせる。唾液の少ない私の舌は彼女の肌に貼りついて、渇いた愛撫をした。初めて舐める他人の乳房は脂のような味がする。妙に白っぽくて、柔らかいそこは少しだけねばねばと甘く、手の上で溶けたアイスに似ている。舌先で啜る人肌の皮膚がバニラ色に染まった。
私たちの息に合わせて、窓の外の景色が歪んでゆく。濡れた窓硝子から流れ出た冷たさはフローリングを這い、私たちの裸体を象った空気の膜で部屋を覆った。街が溶け、石灰色の空と雑居ビルの境目は渦を巻く。薄白い霧が港に停車する白いスカイラインに纏わり付き、子供たちは指先で車体に下品な模様を描く。

彼女に口づけると、ストロベリーの甘い味が舌先に広がる。それが彼女の舌の味なのか、先に食べたアイスクリームの味なのか、今まで溺れたこともないような性の欲求に悶える私には分かり得なかった。

額の生え際に溜まる汗を手で撫で付け、湿った後頭部に手を滑らせる。その行為に燃えるような烈しさは無い。彼女の身体は硬く芯を保ちながら、私の動きに合わせて優しく、柔らかさを演出する。

なまめかしい身体に鼻先を寄せると、そのなだらかな稜線を模す輪郭から、花弁の香りがした。一瞬だけ幻惑されたような眩暈がして、瞬きを繰り返す。ユウは薄目を開けて、私の背後に回した手を、背中を撫でるようにゆったりと動かした。まるで鯨が泳ぐような彼女の緩慢な動きに合わせてぬるい恥部に触れたとき、華奢な葉を押しのけて洞穴をつくった記憶が脳裏を過った。

繁茂するクリーム色の葉が私を優しく包み込んで、まるで子供をあやすように茎を揺らす。彼女の体温を指先に感じながら、私はいま、秘密に抱き留められ、包まれていると微睡みの中で感じた。

私と彼女は静かな性交を交わし、疲れ切った身体を曝け出したまま、抱き合って眠った。酩酊するような眠りの波に押し流される直前、部屋の隅に投げ置いた鞄の中で、私の携帯が喚く

ように何度も鳴っている空想を見た。電源を切ったままの携帯は、鞄の中で冷たく沈んでいる。私は己の罪の意識から目を逸らすように瞼を下した。

物音に目を覚ますと、浴室からユウがシャワーを浴びている音が聞こえていた。ベッドサイドの時計は十六時を指していて、ブラインドを開けっ放しにしていた窓の外は、もう夕暮れの色を見せている。

私は昨夜の情事をぼんやりと思い出し、柔く脆い彼女の感触を、指先に思い出す。彼女の切なげな声の合間、私は身を焦がすような卑しい欲求を剝き出して、その白い首筋に歯を立てた。肉を抉ってしまうのではないかと思うほど強く貪りついた彼女の身体が、まるで宗教画のように崇高な美しさを以て、私の脳裏に焼き付いている。

替えの下着を見繕っている間に脱衣所から出てきたユウが、目覚めた私に気付き、

「おはよう」

と笑った。湿った襟足の陰、私が彼女に残した凶悪な爪痕を、直視することができなかった。

何か食べたいと言う彼女の希望に沿い、私もシャワーを済ませてから、二人でホテルを出た。表通りに出ると何件か飲食店があり、個人経営らしき小さな喫茶店で、彼女はオムライス、私はナポリタンを食べた。ケチャップの濃いナポリタンは大味で、私は実家の母がつくるナポリタンの味を思い出した。

食事を済ませた私たちはホテルに帰らず、海を見に行くことにした。海までは列車で数分ほど行けば着くらしい。彼女のナビゲーションで私たちは駅へと歩き出す。カラオケスナックやバー

が立ち並ぶ裏通りを抜け、初めに降り立った駅から二駅ほど先の、閑静な港を目指した。
「ヒナ、今度は宇和島とか行こうよ」
ホームではしゃぎながら私の前を歩く彼女を追う。途端に何か不吉な予感がして、一瞬足を止めた。伏し目がちに歩く人々の中で、ふと私は視界の端に留まる異質で暗い影に目を惹かれた。
それは喪服を着た老婆だった。黒く光沢を放つ上品な着物に身を包んだ俯きがちなその老婆は、暗く沈んだ表情で小さな背中を丸め、じっと何かを耐えるようにホームの椅子に腰掛けている。
私はその姿に思わずどきりとした。老婆の影は痛ましい憂いの色を孕んで、ホームの壁にまるで染み付くように落ちている。列車を待っているのか、或いは人を待っているのか、身動ぎもせず喪に服す老婆の横顔を見つめながら、私は彼女こそがコウキの母親なのではないかと錯覚した。
「ヒナ、行こ」
ユウに急かされ列車に乗る。席に着いても私は、車窓から見える老婆から目が離せなかった。
発車のベルが鳴り、寒々しい鉄の音を響かせながら列車が緩やかに走り出す。その音に合わせるように、昨夜の雨の冷え込みをしつこく残す風が、老婆のいるホームに吹きつのった。窓の外がフィクションのようにゆったりと流れ始め、徐々にその速度を上げていく。老婆の姿が黒点のようになって消えて、私は焦燥に似た何かに怯えながら、ようやく列車の座席に背を預けた。
向かい合って座るユウは、老婆の姿を何度も思い出している私の方に目をやって、
「なんかカップルみたい」

と気恥ずかしそうにはにかんでいた。チャリ、と音を立てて、いつの間にか彼女の耳朶から下がっていた金色のピアスが揺れる。私はその言葉には素直に頷けなかった。

車窓から流れ込む光が淡く夕暮れを滲ませて、列車は木造建築が立ち並ぶ港町に停車した。青く沈む瓦屋根は、港に立ち込めるぼんやりとした靄を被り、硬く黙っている。

「宇和島まで行けば、海とか見える良いホテル泊まれるかも」

ホームでユウがこちらを見ながら話しかけてきていたが、私はただぼんやりと歩きながら、祖母が他界した日のことを思い出していた。

祖母の最期は、自宅で眠るように息を引き取っていた。

朝、祖母を起こすのは隣の部屋で寝ている私の役目だった。その日も祖母を起こそうと襖を開け、祖母の眠る布団へと近づいた。祖母は家族の誰よりも寝覚めがよく、私が声をかけるとぱっと目を覚まして、

「おはようさん」

と寝起きとは思えぬような張りのある声で挨拶をする。しかしその日、祖母は目を覚まさなかった。肩を揺すりながら何度声をかけても祖母の目は固く閉じられたまま、開くことはなかった。まさかと思いながら脈を診たが、冷え切った腕からは生命の温もりがとっくに抜け落ちていた。

すぐに両親を起こし、町医者の手も借りて祖母の遺体を病院へ運ぶこととなった。祖母の身体を抱きかかえるように持ち上げたとき、その全身の冷たさに思わずぞっとした。水気を失い渇い

た肌が、掌に貼りつくように触れる。初めて直面した死の質感に、全身が妙な緊張で硬直したのを覚えている。

潮の香りが漂う港町は静かで、波音の隙間に私とユウの足音だけが響く。ユウは先を歩きながら時おり私を振り返り、眉根を寄せて目を黒く潤ませた。

遠くの橋上を列車が走り去り、辺りの道路を暮れかけた夕陽が静かに照らす。私たちはぼやけた光の中で暫く立ち尽くし、自分たちが今どこを向いているのか、何度も瞬きをして確かめるように空を見上げた。ここは漁港に近い海岸のようで、コンクリートブロックの高い壁が、右にも左にも、ずっと続いている。近くに寄ると壁に落書きされた巨大な猫のスプレーアートと目が合った。

壁の向こうから潮騒が鳴っている。私と彼女は連れ立って、でこぼことしたコンクリートの道を、音のする方へ突き進んだ。

不意にどこかの家の網戸が開く音がして、小さな子供が、ぱぱ！　と朗らかに呼ぶ声が聞こえた。構ってほしそうな甘えた声に、父親と思しき男性が何やら答えている。私は思わず立ち止まり、その会話に耳を澄ませた。先を行くユウが私が居ないことに気付き、慌てて引き返してきた。

橋の向こうにそびえる鉄の煙突から、もうもうと白煙が立ち上っていて、その下を流れる河川が、煙突の上部でちかちかと光る薄黄色のランプを映して揺れている。私は子供の声に耳を澄ましし、消えては揺れ、揺れては消える、その薄黄色の光を見つめていた。

「ヒナ」

ユウが私を呼ぶ。私はその声を無視して、とあるものを探していた。枯れてゆく木々の香りが侘しい死の香りに化け、潮風と共に私の頬を撫でる。網戸が閉じる前に、私には見つけなければいけないものがある。

いっぱいに吸い込むと鼻腔の粘膜をきんと冷えさせる風は、無遠慮に心臓を高鳴らせ立ち消える。私は風の中で、無意味な胸の高鳴りを聞いていた。子供の声が遠くなり、私は目の前で呆然と立ち尽くすユウの背後に光る、四角い明かりをついに捉えた。

「ヒナ、行こうよ」

こちらを振り向き声をかける彼女の肩越し、遥か遠くに建つ不格好な灰色のアパートが、暮れの空の中ぽつぽつと温かそうな明かりを灯し始めている。まるでそれが、難破した船の上から見えた一筋の漁火のように頼もしく、それでいて幻覚じみた神秘の光のように見えた。

彼女の声が段々と風にかき消されていく。私の心臓は高鳴って、先ほどの老婆の影を、そこに潜むコウキの面影を、フラッシュバックのように思い出す。神経が割れた硝子のように尖って、鼓膜がけたたましい心臓の音を拾う。ユウは今にも泣き出しそうな幼子によく似た、不安な表情で私を見つめ、何事かを叫んでいた。

彼女に笑いかけると渇いた唇が切れ、舐めた舌先に鉄臭い味がした。これから私は彼女に何を言うのだろうか。それは私にも分からなかった。

渇いた風が指先を抜け、掌のなかに刺々しく収まるとき、私は祖母の亡骸をこの手で抱きかかえている気持ちになった。白煙を押し流す風にどこかの家庭の香りが混ざり、子供が母親に返事

をする声が聞こえる。

葬　ヤマメ（とむら　やまめ）／沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科四年

小説部門佳作

邂逅 since1972.

二藤

ドアを勢いよく閉める音で目が覚める。ドアを閉めた衝撃が、ベッドで寝ている私の元に伝わってくる。何事かと慌てて枕元にあるスマホを見ると、「11：05」と表示されていた。アラームを掛けたが、自分で止めて寝たらしい。カーテンの隙間からは、私の目を焼き切らん限りの光が差している。

タオルを乱暴にはたき、大きな足音を立てて歩く音が聞こえた。恐らく、先ほどの物音は母のものであろう。母は時間に厳しく、怠けることが嫌いだ。大学の夏期休暇とは言え、いつまでも呑気に寝ている私に苛立っているのだろう。

ここのところ、母と言い争いになることが多い。お互いに主張を譲らない結果であるが、原因は些細なことが多い。洗濯物を片付けるのが遅い、掃除ができていない、スマホの使いすぎ

……。大学生になれば、家族との関係は疎遠になるものだと思っていた。だが、高校生よりも緩みが出て、怠けないでちゃんとしなさいと言われることが増えていく。親に反抗して自立したいけど、何も出来ない自分に腹立つ。最悪な寝起きで、思考回路はネガティブな方向に染まっていく。

考え出したら止まらない。生まれてから今も過ごす沖縄に対しても腹立つ。海や文化を物珍しく思う観光客の気持ちが理解できない。島だから送料は高いし、行ける場所は限られている。海はただそこにあるだけだ。アメリカの雰囲気が味わえる街並みも統治下にあった影響だ。オンリーワンと言えばそれまでだが、本土より一世代遅れていると感じる。ダサイ。

大好きな親友が、「沖縄に生まれたけど、別に沖縄は好きじゃないから早く出たい」と言い、本土の難関大学へ進学した。有名企業に就職するためには、学歴が重視される。これは、沖縄に限らず、全国の地方と呼ばれる地域では共通の認識であろう。沖縄に残り続けるメリットはないのかもしれない。一流の大学を選ぶ親友の言い分は現実的に感じた。

沖縄に残ることを選択した私は、沖縄の歴史と、文化と、土地を一生背負わされたような感覚になった。家族の縁と同じくらい重いそれに、逃げ出したくなる。

ひとしきり愚痴で頭が埋め尽くされると、猛烈な空腹感に襲われた。昨日の夜は何も食べていないことを思い出す。リビングへ足を運ぶと、母が作ってくれた卵焼きとポークを食パンに挟み、遅い朝ご飯をとった。

食事も親に頼り切りだ。それに気づき、また嫌気がさす。これでは、巣の中で親鳥からの餌を待つ雛鳥だ。巣から出たい。更に欲を言えば、沖縄という大きな巣から出て、親友のように都会で暮らしたい。

今日を機会に、再び一人暮らしの提案をしようか。以前は話すら聞いてもらえなかった。バイトの給料を貯めているため、ある程度の期間なら一人暮らしも問題ないはずだ。勝手に出て行くと、後々厄介なことになりそうなため、せめて親の了承を得たかった。

苛立ちが募った状態の母なら、怒りに任せて「家から出てけ」と追い出してくれるかもしれない。

「おかーさん。一人暮らしの件なんだけど」

丁度、ベランダから出てきたのだろう。リビング付近の廊下で、ランドリーバスケットを乱暴に置く音がした。

「無理よ」

物音よりも大きな、怒号に近い声が返ってきた。

「あんたは、なんも知らないのよ。絶対に無理よ」

まただ。私のことなんて聞く耳も持たない。「家から出てけ」と言われれば、私も清々として出て行けるのに、「何も知らない」と言われるとわだかまりが残ってしまう。

今すぐにでも荷物を詰めて家を出たいという衝動が、徐々に冷めていく。本当にすぐにでも出たいなら、承諾を得る必要はないし迷うこともないだろう。「一人暮らしやってみたら良いんじゃない」という言葉を、心のどこかで期待している私の甘えであり、弱さであった。

結果として、母を更に怒らせてしまった。今の母に言い返しても、求めている答えが返ってくることはない。渋々、スポンジに洗剤をつけて、食べ終わった皿を洗う。

一部始終を聞いていたはずの祖母が、ゆったりとした足取りでリビングへやってきた。

「ななみ、これまだ使えるかね」

鏡台の棚を整理していると見つけたと、古びた革袋を持ってきた。一人暮らしのことについては何も触れなかった。私も触れてほしくはなかったため、そのまま会話を続けた。

「何が入っているの」

「これはね、あんたのおかあが高校生のときに買ったフィルムカメラさ。あのときはでーじ高かったけどねぇ。中開けて見てごらん」

少しカビが生えた革のカメラケースは、固く縮こまっていた。ミシ、ミシ……と音を立てながら引っ張り出したそれは、黒い光を帯びた無骨なフィルムカメラであった。

「ななみはカメラ好きだから、使えそうだったら貰ったらいいさぁ。置いといても使えなくなるだけだからね」

「フィルムもいじったことあるから整備できるかも。おばぁ、ありがとうね」

高校生のとき、私は写真部に所属していた。完全に独学であったが、何気ない日常を切り取ることに面白さを感じた。大学生になると、フィルムカメラに興味を持ち、通販や中古販売店でジャンク品を漁っていた。

母のフィルムカメラの状態をチェックする。モルトが少し溶けて、ファインダー内にチリが見

られるが、状態は比較的良い方であった。あとは、乾電池とフィルムを入れて作動すれば、十分に使えるだろう。
「状態が良い方だから使えると思うよ。フィルム入れて確かめてみようね」
「良かったさ。このカメラはね、ななみのおじいが元気のとき、高校生のおかあに奮発して買ったものでね。おじいもよく釣ってきた魚を撮ってたさ」
「おじいが買ったんだね。大事にするさ」
私の祖父は、五十歳でパーキンソン病を患い、二十数年入院している。寝たきり生活である。気道を切開し発声が出来ないため、私は祖父の声を知らない。母や祖母から昔の祖父の様子を聞くことがある。亭主関白な昭和の男ではなく、料理が上手で面倒見が良く穏やかな性格で、仕事熱心な人だったという。
私は、病院のベッドに横たわって、何もない天井を見つめている祖父しか知らないため、想像がつかなかった。一度でいいから、元気な祖父に会って話をしてみたい。
カメラの保管庫にしまった、未使用のフィルムを取り出しながら、祖父に思いを馳せていた。

自動巻取りとは知らず、フィルムを入れる作業に苦戦する。単四乾電池を四つ入れ、電源をオンにした。ミノルタのマックデュエルは、全ての機能がオートになっている。シャッターボタンを押すと、フラッシュの白い光が部屋を照らした。
カメラは問題なく使えそうだ。オート機能のフィルムカメラは、世代ではない私でも扱いやす

い。私が初めて手にしたフィルムカメラは一九六〇年代のマニュアルカメラであった。使い手が物に合わせる感覚に悪戦苦闘した日を思い出しながら、カメラを観察していた。

すると、見覚えのない機能があることに気づいた。

裏ぶたに日付を設定する項目と液晶画面が付いている。どうやら、写真に日付を挿入することが出来るらしい。そうか、この年代のカメラでは日付を入れることが主流なのか、と感心しながらボタン電池を入れた。今日の日付に設定できるか試してみる。

「あれ、日付のところ上手く設定できないみたい。一九八〇年から動かないな」

「そうね、でも写真が撮れるなら良かったさ。試しに外に出て撮ってきてごらん」

「うん。ちょっとだけ撮ってくるね。すぐ帰ってくるから」

日付を調整する部分だけ正常に機能しないようだが、その他は問題なく使えそうだ。私は、思いがけないプレゼントに心を弾ませていた。母も写真を撮っていたとは知らなかった。仕事や家事で忙しい母が、趣味に没頭している姿は想像できない。

母は写真を撮ることに夢中となった頃に戻りたいだろうか。常に時間に追われる生活なんて、私ならごめんである。

考えを巡らせながら、お気に入りのコンバースを履く。母が生まれたときに建てられたおよそ築五十年の家は、ドアの建て付けが悪い。前屈みになり、片足に体重をかけながら固くなったドアノブを回す。

家の近くには、米軍基地のフェンスが張り巡らされている。滑走路があり、ヘリコプターや飛行機が目の前に迫ってくるかのように着陸する。途轍もない轟音と巨体が迫る様子に、幼い頃は恐怖で立ち竦んでいた。しかし、時が経てば人間は慣れてしまう。いつからか、早朝から米軍基地のゲートで拡張器を使い抗議をする声の方が、疎ましく感じた。

ミ　ミ　ミミミミミミィーーン……

モモタマナの木には、短い一生を叫ぶようにリュウキュウアブラゼミが鳴いていた。辺り一面に響き渡るセミの鳴き声以外、聞こえるものはない。車が通ることは滅多にない道には、私のほかに歩いている者はいない。沖縄特有の強い紫外線で、白飛びした歩道とコントラストの高い緑たちに囲まれると、まるで白昼夢の中にいる気分になった。

それにしても、今日は一段と日差しが強い。汗が滲み出し、地面から滲み出る熱気に立ちくらみがした。

木陰ならば涼しい風を感じ取れるだろうと、木が生い茂るフェンス沿いの小道を歩いた。青々と育った雑草の中にある、小さな白い花を見つけた。境界があるなんて知る由もない花は、あちら側からこちら側へ体をくぐらせ健気に咲いている。

最初の一枚はこの花にしよう。日付は一九八〇年に設定したまま、白い花にピントを合わせ日の丸構図で撮る。

カシャッ

刹那。シャッターを切ると同時に、経験したことが無いほどの頭痛に襲われた。頭が割れそうだ。目の前が暗くなっていく。私は、倒れないようにその場で目を閉じてしゃがみ込むしかなかった。

数十秒が経過しただろうか。すぐに頭痛は収まったが、ある異変に気づく。子どもたちのはしゃぐ声が近くで聞こえる。私が写真を撮ったとき、周りに人はいなかったはずだ。

「ななこ、急に止まってなんかあったば」

顔を挙げると、私の隣にいた小学二、三年生ほどの男の子が声をかけてきた。

「ななこってそれ、私に言ってる?」

『ななこ』は私の母の名前だ。私であるはずがない。人違いだろうか。

「やー以外、誰がいる?　頭おかしくなったんか」

男の子は私をからかうような声で答えた。思えば、辺りの様子に違和感がある。場所は同じはずだが、道は舗装されておらず、辺りに煙が立ちこめている。

「あーすまちゃー、早く追いかけよ」

あーすまちゃー。前方を見ると、軽トラックから出た白い煙を、子どもたちが夢中で追いかけ

ていた。以前、母が懐かしそうに話していたことを思い出す。確か、あーすまちゃーとは殺虫剤散布車のことである。母が小学生の頃、蚊の伝染病防止のために殺虫剤をまいた車が巡回していたという。母は、不思議な光景に好奇心が抑えられずに見かける度に追いかけ回していたと語っていた。

もしかすると、私は昔の母になっているのだろうか。信じがたいが、あーすまちゃーの存在や、子どもたちの様子を見るにそう思わざるをえない。フィルムカメラの一九八〇年が関係しているのだろうか。

想像以上に、辺りには殺虫剤の甘い香りが立ちこめていた。私は反射的に軽く息を止めた。道路に面した家の窓は、煙が入らないようにするためか、全て閉め切られている。殺虫剤散布車を追いかけて、子どもたちに影響はないのだろうか。わからない。わからないけど、良くない気がする。

私に声を掛けてくれた男の子は、既に散布車の煙の中にいた。男の子に危険であるかもしれないことを知らせるために、全力疾走で駆け寄った。

「ねぇ、車追いかけるのやめようよ。これ、吸い込むと危ないかもよ」

「は？　何言ってるば、ななこ。いつも、みんなで追いかけてるさ。怖くなったわけ」

男の子は、私は掴んだ腕を乱暴に振り解いた。

「やーみたいななちぶー、仲間に入れんからよ。怖いんだったら、一人で遊んでおけ」
私の言い分など聞く耳を持たず、男の子や他の子どもたちは、あーすまちゃーの雲の中へと消えていった。
殺虫剤を思い切り吸ったからか、息苦しく空咳が出た。目もしょぼしょぼして痛い。あの子達は平気なのだろうか。どこか痛くないだろうか。

フィルムカメラは左手で持ったままだった。カメラだけはそのままの形であった。
この先、どうすればいいのだろう。家に帰れば何か分かることがあるのかもしれない。舗装されていない道に転がった石を蹴飛ばしながら、来た道を辿っていた。
米軍基地のフェンス付近の小道まで来ると、女の子が一人で花を見つめていた。
「ねぇ、あーすまちゃー追いかけないの」
問いかけると、女の子は顔を上げて眉をひそめた。
「あんなの、くさいだけさ。あれのせいで、私の鯉が死んだんだ」
「本当に鯉が死んだの」
「あれが、道を走るまでは元気だった。走った次の日に池を見たら、みんな死んでたんだ。絶対、あーすまちゃーのくさい煙のせいで死んだ」
女の子によると、家の池で飼育していた鯉が、殺虫剤散布車が巡回するようになってから謎の不審死を遂げたという。大事にした鯉が死んだことに憤りを感じ、巡回中は家の窓を施錠し、

息を止めていたらしい。
「川の近くで咲いている花、摘みに行こう」
そう言うと、女の子は小動物のように軽々と金網にあいた穴を通り抜け、基地の敷地へ入っていった。
「危ないよ。そこ、米軍の土地だよ。捕まっちゃうよ」
「いいもん。フェンスの穴から入ってみんなで遊んでるさ。すぐに出れば大丈夫よ。見つかったら銃で撃たれるかもしれんけど」
大人達から同じ注意を何度もされているのであろう。金網越しから、少し睨みを利かせた目でこちらを見つめた。

現代の金網よりも、簡素的に作られていて、小さな穴がいくつかあいている。好奇心から入る小学生が多いのだろう。こっそり軍事基地の敷地内に入って、遊ぶことが日常化しているようだった。勿論、昔でも犯罪にあたる極めて危険な行為であるはずだ。
だが、現代よりも緩い規制だったのだろうか。この時代の社会事情については理解し難い。ただ、殺虫剤散布車の巡回が日常化している世の中なら、このくらいは許されるのではないかと思う自分がいる。おそらく、当時の人々もそのような認識であったのだろう。
子ども達が置かれた状況を自分なりに汲み取り、なるべく女の子に寄り添おうと決めた。私が親に反抗するように、女の子も大人や世の中に抗っているような気がした。

小さな体を更に小さく丸め、小さな穴をくぐり抜ける。女の子の言う通り、小川を沿うように白い花が咲いていた。それは、私が写真を撮った花であった。同じ場所なのだから、同じ花が咲いていることは何もおかしくないが、どこか運命的な巡り合わせを感じた。

「お花を集めてるの？」

「うん。鯉のお墓に供えるの。なんも無かったら可哀想でしょ」

女の子と出会った時に花を眺めていたのはそのためか。

「うちのおばあね、たまにおかしくなるの。戦争のことを思い出して、鎌を振り回してね。私が生まれる前に、家にある牢屋みたいな小屋に閉じ込められていたみたいなの。苦しくて寂しかったんだろうね。『私には花の一つも無かったくせに』って、鯉の墓に供えた花を潰すわけさ」

私は立ち尽くした。花を摘む女の子の顔はよく見えなかった。怒っているのだろうか。悲しんでいるのだろうか。込みあがる感情をどこにぶつけたらいいのかわからないようだった。

花を潰される度に、摘み直しに来たのだろう。花が咲く場所を覚えているようであった。無断で敷地へ入る危険を冒す姿と、女の子の無垢な気持ちの矛盾が痛々しかった。

沖縄ってなんだろう。海に囲まれた県、亜熱帯の気候。台風が多い。大きな輪。戦争と統治の影響が大きい。戦争でおかしくなった年寄りへの抵抗で基地の中に入る子ども。きっと、何が正しいとか無かったのだ。変わりゆく世の中を受け入れるしかないような、でも抗いたいような、そんな感じ。

唐突に女の子は振り返り、こちらへズンズンと歩いてくる。
「あげる。手、出して」
言われるがまま手の平を広げる。女の子が、壊れ物を置くようにそっと一輪の花を乗せた。
「日々草って言うんだって。『楽しい思い出』っていう花言葉があるんだよ。みち、本で調べたの」
白くて中央が赤く色づいた、小さくて可愛い花だった。『楽しい思い出』は、供える花としてこれ以上にない花言葉だった。
「楽しいことだらけじゃなかったけど。次に生まれ変わったときはね、みちとの楽しい思い出を覚えていてほしいな。今は、いろいろ大変だけどさ。もし、人間に生まれ変わったときは、もっと楽しい思い出を作ってほしいと思っているわけさ」
この花は、弔いであり祈りであった。
「写真、撮ってもいいかな」
女の子と日々草を撮りたくなった。仄かに残る殺虫剤の甘い匂いや、照りつける初夏の日差し、けたたましく鳴くリュウキュウアブラゼミがここはリアルだと訴えかけている。母の思い出を夢として見ているのかもしれない。私にとってはただに幻想かもしれない。だが、女の子にとってはこの世界が本物で全てなのだ。そのために、私は写真を撮ってこの日を刻まなければならない。宿命にも似たそれに私は突き動かされていた。

ミ　ミ　ミミミミミミミィーーン……

「花、持ったままでいい？」
女の子は、日々草を握った手を胸の辺りにかざす。少し照れくさそうにこちらを見つめていた。
「それ、変わってるカメラだね。高そう」
「高いからねぇ。綺麗に撮ろうね」
フィルムカメラに興味津々な様子だった。緊張して強張っていた顔が徐々に綻ぶ。その表情に彼女らしさが出ているようで、私は自然とシャッターを切った。

カシャッ

カメラを下げると、目の前は海であった。波の乱反射で目が眩む。波の動きに合わせて、私も揺れている。私は船に乗っていた。目の前には、釣り竿が海に向かって垂れている。フィルムカメラは、そのままの形で私の手に収まっていた。
ある疑念が生まれ、私は慌てて裏ぶたの日付を見た。そこには、一九八八年と記されていた。一九八〇年から日付は動かなかったはずだ。だが、大海原に浮かぶ船にいることを考えると、私は、一九八八年に来てしまったのだろうか。もしかすると、シャッターを切ったあの瞬間に、時間が進んだのかもしれない。現実離れしたこの状況を説明するには、現実離れした考えになる

しかなかった。
「ななこ、まだ釣れてないか」
声を掛けられ振り向くと、そこには日に焼けた男がいた。五十代であろうか。Tシャツからは引き締まった腕が覗く。普段から外で働いていることは容易に推測できた。キャップを被りライフジャケットを着用した姿は様になっていて、熟練漁師を彷彿させる。初めて会ったはずだが、どこか見覚えのある顔であった。
「父ちゃん?」
何故だか、直感的にそう思った。私が見た祖父は、入院生活で白くなった肌に痩せ細った腕、焦点の合わない虚ろな目をしていた。だが、ぼんやりと姿形が重なり、今、目の前にいるのは私の祖父であると細胞が囁いているような気がした。
「どうした?急に真剣な顔して。気分悪いのか」
顔が強張っていたのだろう。祖父は眉をひそめ、こちらを心配するように覗きこんでいる。
「ううん、なんでもないよ」
心配をかけないよう努めて明るい口調で答える。小さなときから祖父の姿を見ているが、喉が切開されているため会話をしたことがない。人物像もはっきりとしない。家族であるが、初対面の人と話すときのような緊張感に包まれた。
「ななこは船に乗るの久しぶりだからね。でも、すぐに慣れるはずよ。もう少し待ってね」

母は以前にも乗船したことがあったらしい。祖父が船を所有していたことは耳にしていたが、母も共に釣りをしていたことまでは知らなかった。やはり、これは母の思い出の中なのだ。

目的のポイントに到着したようだ。船の動きが緩慢となっていく。

祖父は操縦桿から離れ、筋肉質な腕で大きなトランクを軽々しく持ち上げ、準備を始めた。祖母の話に拠れば、普段は配送業に勤しんで休日は釣りを楽しんでいたという。あまりにも手際が良いため、趣味ではなく本職なのではないかと疑ってしまう。

「今日もおかあと喧嘩したのか？　おかあが、「ななこは何もしないのにいつも文句ばかりで困ってるさ」って言っていたよ。お前も高校生になったから、少しはおかあの気持ちをわかってやれ」

手を休めることはなく、穏やかな口調で祖父は言う。まるで、私と母のことを言っているかのようだ。喧嘩の理由も寸分違いない。祖父は怒っている様子ではなかった。ここへ連れてきたのも母の気分転換を兼ねていたのかもしれない。

心地良い風と、穏やかな波に体を委ねる。私自身、初めて船に乗った。波の動きに合わせて不規則に揺れる船は、立っているだけで体力を消耗する。船を遮る物は何もない。辺り一面に広がる青に、私の心が落ち着いていくのを感じた。

小魚が海面付近にいるに違いない。クックッ・・・・・と喉を鳴らしながら、ベニアジサシが旋回し獲物を見定めていた。ちゃぷんという音がした頃には、小魚を咥えたベニアジサシが真白な

羽を広げていた。瞬く間に、その姿は小さくなり雲の中へと消えていった。
私も。私も、好きなように羽ばたけたら。広大な空を自由自在に飛ぶ鳥が恨めしい。
「私ね、自由になりたいんだ」
私は、ぼそりと呟いた。汚れのない空と、狂おしいほど青く光る海に後ろめたさを感じ、俯いて足下にあるコンテナを見つめる。
釣り針に餌を仕掛け、海へ投げ入れた祖父はこちらを振り向いた。
「ななこ、近くに来なさい」
聞こえていたのだろうか。語気を強めて祖父は近くに来るよう促した。母親のように、「何も知らない」と叱るのだろうか。

「ななこは、自立したいんだろうね。その気持ちは、私も十分に理解しているよ」
私の母のように、頭ごなしに怒鳴ることはなかった。相談事は、聞く側が冷静になるべきであるということは基本中の基本である。しかし、私にとってそれは新鮮な出来事であった。
「少し長くなるけど、昔話をしてもいいかね。私は、沖縄本島の生まれではなくて、久米島出身だった訳さ。十人兄妹の末っ子でね。ハハハ、今では考えられないけど、昔は沢山家族がいることは普通だったんだよ。ねーねーや、にーにーと食べ物の取り合いで、毎日が戦いだったさ」
昔を懐かしんでいるのだろうか。声色が明るくなった。
「私の家は、魚を取って暮らしていた。いわゆる漁師だね。小さい頃から、よく手伝いをして

いて、そのおかげで今も釣りが好きな訳さ。でも、ななこと同じくらいのときに島を出たくなった。兄姉は、久米島で就職したり漁師として生活していた。私もその後に付いていけば、人生は安泰なことはわかっていた。けれど、島以外での暮らしに憧れてしまってね。お金もなければ、行くあてもなかった。そして、分が悪いことに母親が病気で寝込んでいた。私が島を出る必要はあるはずもなかった訳さ。当然、親に猛反対された。私はとんでもない頑固者でね。計画を立てた頃には、島に残ることは選択肢になかった。逃げるように沖縄へ来たんだ。あまり、思い出したくないけどね」

徐々に早口になり、後半は捲し立てるようであった。振り返りたくないことがあると、人間は反射的に逃げだそうとするのだろうか。

「仕事で言葉が通じないから、久米島の方言を使わないようにした。寝る間を惜しんで働いた。仕事先で、お前のおかあと出会って結婚した。お前達に巡り会えて、今は幸せだ。でもな、久米島に帰ることだけは、どうしても出来なかった」

その意味が分かるか、と祖父は問いかけた。私はすぐに答えが思い浮かばなかった。

「私は、島を、家族を捨てた。家族に見送られて出航するのとは、訳が違う。子はいずれ、親から離れる。だからな、然るべき時が来たら人間は自立せざるを得ない。もう少し、親の話に耳を貸せばよかった。何を求めていたのか理解できないままだった」

私は、自身の経験から諭されることに若干の抵抗感がある。何様だ、と思われるだろうが、私と他者では、生まれた環境や人、年代が異なる。それなのに、同一視され「私はこうだったたから君もこうしろ」とするのは些か強引な手段なのではないか。

だが、それを言ってしまえば伝承や教えを否定してしまうことになり、私のことを思っている祖父の気持ちを踏みにじることになる。私のひねくれた天邪鬼な心情を知ってか知らずか、祖父は苦笑いをしながら付け加えた。

「私の昔話は、軽く聞き流してくれていい。でも、焦りは禁物だ。親が子の旅を止めるということは、何かしらの理由があるかもしれないということを、心の隅に留めていなさい」

「何か理由があるかもしれない」という言葉で、母の怒号が蘇った。私は、まだ家から出るべきではないのだろうか。母は、私に残って欲しい理由を抱えているのだろうか。いくら考えても私には見当が付かない。眉をひそめ、思いにふける様子から何かを感じ取ったのか、湿っぽい話は終わりだ、終わりだと祖父は手を豪快に叩いて話を無理矢理中断させた。

「そおれ、もう餌を食っている。これは当たりが大きいぞ」

祖父の言う通り、釣り竿はしなり小刻みに震えていた。魚がかかったようである。祖父が逃げだそうとする魚の動きに合わせて巧みにリールを操ると、白い飛沫が上がる。次第に魚影が私のすぐ傍までやってきた。鱗がぎらぎらと揺らめいているが、魚の姿形までは確認できない。網を片手に、祖父は尾をしきりに動かす魚をひょいとすくい上げた。

「おお、こりゃ立派なグルクンだ。今日の晩御飯は豪華になるさ」
網の中を覗き込むと、そこにいたのは、体が鮮やかな赤色に変化した三十センチ程のグルクンであった。私は、人生で初めて釣り上げた魚に興奮を抑えきれなかった。
「カメラで父ちゃんとグルクンの写真を撮っても良い？」
私は、左手で持っていたフィルムカメラを見せて返事を待った。祖父は、それを見るや否や、満面の笑みになり、真白な歯を覗かせた。
「父ちゃんが買ったミノルタ、持ってきてたのか。いつも、釣りに行く時には持って来ていたけど、今日は忘れてしまってね。ななこが持っていてくれたんだね」
だあだあだあ、と言いながらグルクンを胸の前に掲げ、こちらを見た。
「上等に撮ったらいいさ。ななこは写真を撮るのが好きだからね」
私が、正確に言えば母が写真を撮る姿が、祖父はお気に入りのようだった。意気揚々とし、早くシャッターを切れと言わんばかりだ。私は、ファインダーを覗いて、強い太陽の光で写真が白飛びしないように調整した。

カシャッ

ファインダーから視線を外すと、そこは家の屋上だった。目の前には、鬼の形相で怒鳴り声を

上げている祖父と、泣きながら祖父の腕を捕まえている祖母と伯母らしき姿があった。
「人が、人がいるのわからんか！　ここにいるさ、ここに」
何もない場所を指しながら祖父は声を荒げた。
「何を言ってる、父ちゃん。何もいないさ。家の屋上に人なんていないよ」
「早くやっつけんと、家のもの全部盗られる。父ちゃんがやるしかないさ」
祖母が必死に説得するも、祖父は人がいると言い続けている。祖父の手には木刀が握られていた。
「父ちゃん、危ないからやめてっ」
祖父が木刀を振り回し、祖母と伯母の制止を振り切ろうとする。私は夢中で、祖父の前へ飛び出した。
強い衝撃と痛みが肩に走る。木刀の先が当たる感触があった。
「ななこ！」
祖母と伯母が青ざめた顔で私に駆け寄る。私は、激しい痛みとショックで動けなかった。魂が抜けたような虚ろな表情で、祖父が私を見つめている。シャッターを切る前の優しくて満面の笑顔を向けていた祖父ではなかった。私は、あまりの変わりように底知れぬ恐怖を抱いた。
「肩、大丈夫ね。早く診ないと」
伯母に支えられながら、屋上の階段を慎重に降りる。
居間まで来ると、伯母は薬箱を持ってきた。そして、私の服を脱ぐ手伝いをしてくれた。包帯

や消毒液を慣れた手つきで取り出す。
「むっ姉、なんか慣れてるね」
「当たり前でしょ。看護学校に通ってるし、これくらい出来ないと」

この時代の伯母は、看護学校に通ってるらしい。高校を卒業して間もないようで、今の私と同年齢のように思えた。つややかで真っ直ぐに伸びた黒髪が、規則の厳しさを物語っていた。現在の伯母は、脳神経外科に所属し、師長という役職に就くベテラン看護師になっている。
「あんまり強く当たってなかったみたいだね。少し皮が剥けて赤くなってる。大けがにならなくて本当に良かった」
傷口に消毒液の染み込ませた脱脂綿が押さえつけられる。焼けたような痛みが否応なく、一連の出来事をフラッシュバックさせる。温厚な祖父からは想像ができない取り乱しようであった。一体、何が起きたのだろうか。

「父ちゃん、今日はいつもより酷かったね」
「いつもなの」
「ななこ、何とぼけたこと言ってるの。父ちゃん、今年に入ってから急におかしくなったじゃない。手の震えは酷くなるし、壁に虫がいるとか、腕の中に何かいるだとか」
伯母の話す祖父の様子を聞いてハッとした。これは、パーキンソン病の治療薬からくる副作用

なのではないか。中学生の頃に一度、祖父の病気に興味を持ち調べたことがある。確か、症状としては手の震えや姿勢保持障害が主に目立つ。進行性の病気のため、進行を抑える薬を服用するも、せん妄や幻聴、幻覚などの強い副作用が現れるらしい。

私の知っている祖父は、末期まで病気が進み寝たきりになっている。この時代の祖父は、おそらく病が進行している最中だ。

しかし、元気な祖父と出会った一九八八年から、二年しか経っていない。僅かな間で病が進行したのだろうか。

「病院嫌いだから、いくら言っても父ちゃんは病院に行こうとしないし。やっとの思いで病院に行って、薬を飲んでもどんどん悪くなっていくし」

次第に掠れる声と比例して、包帯を巻く力は強くなった。

「だから、私が看護婦になるの。看護婦になって、父ちゃんの病気を治すの。ななこには言ってなかったけどさ」

「むつ姉……」

「勉強しないで遊んでばかりのあんたには無理だけどさ。昨日、美容師になるの諦めるって言ったのも、美容学校のお金がかかるからでしょ。父ちゃん、働けないからって心配してるんでしょ」

母は、美容師を目指していたと聞いたことがある。本人は「頭は悪いけど、手先は器用だっ

たからさ。美容師さんかっこいいし憧れていたな」と話していた。諦めた経緯までは語らなかったが、祖父の病気が関係していたのか。

「お金も大事だけどさ。できるだけ、あんたが後悔しない道を選びなさいね」

後悔しない道。母は、選べたのだろうか。現在の母は、清掃員、配達員、コールセンター職員とパート職を転々としている。安い給料と厳しい労働状況に頭を悩ませている様子を見てきた。だからこそ、母を反面教師として、少しでもいい企業に就職するために、私は沖縄から出たかったのだ。

「親が子の旅を止めるということは、何かしらの理由があるかもしれないということを、心の隅に留めていなさい」という祖父の声が反芻する。あの時の祖父は、母の自立を止めたかったのだろうか。僅かな時間しか時間を共有していない私には、わかる術はない。ただ、今、母がこの場にいるということは、実家暮らしをしている可能性が高い。この時の母は、父の看病という理由で家を出なかったのであろう。

私に一通りの処置を施した伯母は、依然として椅子に腰掛けたままであった。眉間に皺が寄り、きつく結ばれた口元からは日々の苦悩が垣間見える。手入れされ、つややかで真っ直ぐな黒髪の中に、きらりと光る白髪が混ざっていた。看護師になると言ったものの、父の面倒や学費の捻出を考えれば、その重圧は計り知れない。

祖父の言葉は、至極真っ当な正論であった。祖父の言葉で、これまでの自分の浅はかさを反省した。だが、時として、離れられない家族の存在が、人を苦しめることもあるのだ。家族という縁は、簡単に切れるものではない。弛んだり、伸びたり、絡まったと思えば擦り切れて細くなる。死んでもなお、生き残った家族がいる限り途絶えることはない。

表面的には何も変化しないように感じる、縁の最大の敵であり味方は、時である。

それに、映画やハートフル番組のような、感動的展開にならないことを私は知っている。

いくら母達が祖父を看病しても、病気が良くなることはない。むしろ、症状が悪化し手に負えなくなったため、祖父は長い入院生活を送ることになる。釣りを楽しみ、子どもを思う祖父は戻ってこない。神様は、フィルムカメラを通し、私に過去の思い出を見せて何がしたいのだろう。私が親不孝者だったから、罰として与えたのだろうか。沖縄を、生まれ島を、侮辱したからだろうか。

私は当事者ではないから、沖縄のこと、家族の過去の辛さはわからない。けど、少なくともわかりたいと思うようになった。

「沖縄に生まれたけど、別に沖縄は好きじゃないから早く出たい」と言った親友の顔が思い浮かぶ。社会の波を必死に泳いだ人々の築き上げたものは、今でも少しダサいと思ってしまう。泳ぐことに精一杯で、その先のことを見据える余裕がない。

フィルムカメラを通した邂逅で、必死に泳ぐ人々をこの目で見た。みんなもがいていた。自立

したくて葛藤している私と比べていいのかわからないが、似ていると思った。私は、何も知らないし何もわからなかった。知ろうともしなかった。沖縄のことも享受されるだけで、家族のことも私から聞くことは、ほとんどなかった。

「何も知らないから無理」と言った母の言葉は、おそらく理に適っていたのだろう。本当に、過去から学ぶことは何もないのか。他者の経験は、考えや価値観の押し付けなのか。そうやって、世界を閉ざすことに対し喪失感を覚えた。

ただの大学生の私に、何ができるのだろう。何を期待されているのだろう。私が、「何も知らないということを知れた」だけで十分な成果なのだろうか。高校で習った、ソクラテスの「無知の知」が思い浮かぶ。確か、そんな意味だった気がする。

私は、自然とフィルムカメラを構えファインダーを覗き込んでいた。一生、過去から抜け出せなくても良い。この追憶に意味がなくたっていい。憔悴しきった伯母にピントを合わせると、私はシャッターを切った。

カシャッ

目を開けると、そこには見覚えのない天井が広がっていた。なんとなく体が重く、息苦しい。私のすぐ傍に誰かがいる気配がした。

「ななみ、目、覚ましたのかい」

その声は祖母のものであった。久しぶりに私の名前を聞いた。母の思い出ではなく、私がいる世界に戻ってきたようだった。

「お医者さんを呼ぼうね。すぐに来るからね」

医者。私がいる場所は病院なのだろうか。体に力が入らず、起き上がることは難しい。だが、私に刺さった注射針や四方にある柵を見るに、確かにここは病院で、私は入院しているようであった。

ほどなくすると、医者らしき人物が私の元にやってきた。

「目が覚めたようで良かったです。熱中症と思われる症状で搬送されたのですが、意識不明の状態が数日続き、大変心配しておりました。これ以上、昏睡状態が続けば大変なことになっていたかもしれません」

淡々と落ち着いた口調で話す医者の言葉に私は驚いた。倒れたという記憶は一切なかった。

「カメラで写真を撮りに行った日があったさ。道でななみが倒れているって近所の新垣さんが教

えてくれてね。急いで救急車を呼んで、そりゃ大騒ぎになってね」
祖母が病院へ運ばれるまでの経緯を話してくれた。私が倒れたのは、おそらく母と喧嘩して試し撮りをするために外出した日だ。シャッターを切る前、猛烈な日差しに立ちくらみをしたことを思い出した。
頭痛がした頃には、私の意識はなかったのであろう。つまり、今まで見たものは、昏睡状態に陥った私が作り出した幻だった。私自身の走馬燈ではなく、母の思い出を巡っていくとは何とも不思議な話である。
「お母様はいらっしゃいますか。確認したいことがありまして」
「今ですか。今、ななこの母は勤務中で来れないはずです。電話を掛けて呼びましょうか」
医者の問いかけに祖母は困惑した顔で答えた。映画では感動の再会となるであろう場面だが、相変わらず母は仕事で忙しいようだった。いつも通り。普段と変わらないことが、逆に私たちの家族らしさを表しているようで悲観的にはならず、寧ろホッと胸をなで下ろす気持ちが押し寄せた。
「早急な確認ではありませんので、ご都合の合う時間で大丈夫ですよ。また来ますので、その際に教えてください」
そう言うと医者は、早々と病室から出た。他にも診なければならない患者が大勢いるのだろう。
医者に付き添っていた看護師へ指示を出し、せわしくカルテに何かを記入していた。

医者も大変なんだな、と月並みの感想を呟く。窓辺にある荷台に目をやると、フィルムカメラがあることに気づいた。

「フィルムカメラ、持ってきてくれたんだ。ちょっと触っていい」

鉛のように重い体をなんとか起こして、フィルムカメラを手に取る。夢の中で散々と言っていいほど触れてきたカメラだ。夢の続きを見ているようで、気持ちが高揚する。裏ぶたを確認すると、今年の日付である二〇二一と表示されていた。勿論、過去の日付は表示されていない。あれは、私の夢の中で起こった出来事なのだ。現実ではありえないタイムトラベルに対して微かな期待を寄せていたため、正常に機能するフィルムカメラに少し落胆した。

フィルムカメラの全体を見渡す。隅々まで観察すると、ある部分に違和感を覚えた。

「これ、私以外で誰かシャッターを切った？」

「ななみ以外？さあ、わからないけど、病院にすぐに持ってきたから、誰も触っていないはずよ。病院の中は撮影禁止だからね」

撮影可能枚数のダイヤルは五を示している。つまり、既に四枚の写真を撮っているということだ。一枚は、倒れる直前に撮った、あの日々草であろう。しかし、撮影直後に倒れたならば四枚も写真を撮っているはずはないのだ。誰かが、残り三枚のシャッターを切ったのだろうか。

もしかすると……。確か、私は夢の中でシャッターを三回切った。その三枚がフィルムに

記録されているのではないか。いや、そんなことはあり得ないと否定しながらも、頭の中からその考えがこびりついて離れなかった。

いずれにせよ、フィルムを現像しなければ真実はわからない。臨死体験、幻、走馬燈。白い花を大事そうに抱える女の子の柔い指先。日に焼けた顔で照れくさそうに笑う祖父。看病に苦しみこれからの将来に不安を抱える伯母の、きつく結ばれた口元。全てを鮮明に覚えている。それは、私に忘れるな、忘れてはならないという忠告なのだろうか。

病室の窓から、過去と同じ澄んだ青い空が覗いている。空の色は、今も昔も変わらないようだった。今日、明日で私は変わらないし、沖縄もすぐには変わらない。小さな不満とある程度の折り合いを付けながら、生きていくのだろう。

知りたいことが数え切れないほどある。

母に連絡を終え、付属のテレビのチャンネルを変えようと、リモコンを操作する祖母に問いかけた。

「お母さんが、小さい頃って……」

二藤（にふじ）／沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科二年

小説部門佳作

電照菊と「闇」

羽影　憂

肌寒い夜のことだった。片足の爪先に触れた小石を蹴りながら、僕は夜道を行く。空には、満点の星が一つ一つ白っぽい光を解き放っていた。しかし、月だけは雲に身を隠しているせいか、今晩の空はあまり明るいとは言えなかった。無数の星も月のように地上を照らしてくれないものか。ただひたすら輝くことしかできないのか。僕は空を仰いで、ただ他愛のないことを考えた。小石がまた片方の足に触れる。

今、僕が歩いているのは見慣れた道ではなかった。むしろ初めて通る。周囲に民家はなく、ビニールハウスや畑が集中しているようだった。街灯は点々としか見られない。どうもここは農道らしかった。舗装されていない砂利道ばかりが続く。闇夜に見知らぬ道を通るのは危険な気もする。幼かった頃の僕であれば、迫り来る暗闇から逃れるように勢いよく突っ走っただろう。いや、幼い僕は泣き虫の臆病者だったから、暗闇に為す術もなく、ただ涙を流して地面に蹲っていただろう。僕は相変わらず、暗闇の中に何者かが潜んでいて突然襲い掛かってくる場面を想像してし

まう。そんなわけで、僕は今でも暗闇に対して恐怖を感じる。しかし、大学生となった今では、その恐怖心に勝る何かが夜道を歩く僕の両脚を軽くしていた。その何かとは、夜への愛着と好奇心だった。夜だと熱い日光が空から降り注ぐことはない。代わりに月と星が夜空を飾り、弱々しくも、穏やかで美しい光を地上に落としてくれるのだ。冷たい空気が僕の肌を撫でる。僕以外に夜道を歩く通行人も、夜の道路を走る自動車もほとんどいない。却ってそれが落ち着く。また、僕は夜の散歩を始めてから、昼間には見えなかったものを発見するようになった。ついこの間は道路の上空を一匹の蝙蝠が滑空しているのを見た。一昨日には近所にある普通の教会が、夜には白い十字架をライトアップさせていたのを発見した。僕はいつの間にか暗闇への恐怖心よりも、夜という時間帯における新たな発見に期待する気持ちの方が強くなっていた。幼い頃の僕からしたら信じられないような感覚だった。今の僕は、夜が好きだ。

しばらく行くと、ビニールハウスの先にある砂利道がやけに明るいのに気付いた。明かりのある場所は畑らしかった。しかも広々としている。人気のない暗い農道で誰が何をしているのだろう。畑の所有者がまだ農作業を続けているのだろうか。僕は実際光がほとんどない夜道を楽しんでいたのだが、あの明るい畑に楽しみを邪魔されて気を悪くすることはなかった。むしろその畑の正体を無性に確かめたくなった。僕はそんな気持ちに突き動かされて、さっきよりも軽くなった脚で前進した。ビニールハウスに面した道を通り抜け、明るく白い砂利道に差し掛かる。僕は両脚をぴたりと静止させると同時に、顔面を畑の方へ向ける。

目の前に無数の光が浮かび上がった。暗闇に目が慣れてしまったせいか、それらがとても眩し

かった。最初の内は目を細めていたが、瞼の開閉を繰り返す内に光に慣れてきたらしい。無数の光に見えたのは大きく丸い電球だった。吊り下げられた電球の下には沢山の葉を付けた茎の長い植物が多く植えられていた。その植物達の茎の先端には、小さく白い蕾が可愛らしく上を向いている。ここは、以前両親から聞いた電照菊畑に違いない。僕の住む地域では菊の電照栽培が盛んで、年間の菊の出荷量は他の地方より飛び抜けて多いそうだ。菊を照らす光の美しさから「キクミネーション」とも呼ばれ、観光スポットとしても密かに有名になりつつあると言う。僕も、菊より光だ。風が吹いて、真っ白に光る丸い玉が鈴のように小さく揺れる。震える光の玉に、菊畑で戯れる幼子のような愛らしさを覚える。思わず溜め息が出た。光が僕を虜にしたのだ。美しい光の園がまさか自分の家の近所に佇んでいたとは思わなかった。僕は電照菊畑の間にある畑道に進んだ。白い光の畑の隣は、赤と白の光で溢れていた。赤い電球と白いそれが交互に並んでいる。まだ葉が付いているだけの茎に、紅白の光を浴びせていた。光の園を眺めて嘆息しながら、僕はゆっくりと歩いた。

どこからか、たん、たん、というリズミカルな物音が聞こえてきた。それはボールを地面に突く時の音に似ていた。視線を前方に戻すと、何かが反対側からやってくるのがわかった。僕はどきりとした。ゴムボールのように弾む、黒い物体。それは、黒い外套を羽織った小柄の男だった。この町では見かけない人物だ。今時外套と山高帽子というスタイルで外出する人はいない。男の身体が上下に揺れる度に、帽子も小さな跳躍を繰り返しているようだった。彼を凝視すると、帽子の下から現れた顔は紙屑のように皺くちゃだった。髪型も切り揃えられた白髪だ。老人

は軽快な足取りでスキップし、僕のすぐ横を通り過ぎた。足音は僕の背後でふっつりと消えた。僕はゆっくりと後ろを振り返った。老人の姿は消えていた。僕は町内で健康維持のために運動する老人たちを見掛けたことはあるが、先ほどの老人のように膝と太腿を高く上げて軽くスキップできるような人はまずいない。彼は本当にこの町の住人だろうか。一瞬奇妙な感情に囚われたが、僕が二十年間この小さな町に住み続けたとしても知らない人の一人や二人はいるだろうと思うことにした。

ところが、今度は後ろから足音が聞こえた。ぱっと振り返ると、先ほどの男が何度も跳躍しながらこちら側にやってきた。往復してきたのだ。僕はびっくりして、無意識に二、三歩後退した。帽子の下から見えた老人の顔は土気色だった。飛び跳ねる度に翻る真っ黒な外套は、夕暮れ時に群れをなして飛翔する鴉の大きな翼のように見えた。眼光は標的を狙い撃ちにする鷹のように鋭い。僕の脳は危険信号と避難命令を両脚に送った。しかし、両脚は命令に従わなかった。老人がすぐ目の前にまで迫ってきた。僕は強く目を瞑った。

足音はすぐ真横を通過した後、そのまま遠退いた。そして、風が一瞬止んだ時のようにすっと消えた。僕は恐る恐る瞼を開いた。安心したのか、思わず脱力してしまうところだった。体が硬直した分疲労が蓄積されたのかもしれない。今すぐ座り込みたい気分だ。全身の力が抜けたせいか、僕は何の考えもなしに振り返った。

老人の姿があった。老人は枯れ枝のような身体を捩らせてこちらを凝視していた。僕は思わず悲鳴を上げた。両脚は漸く事態の深刻さを把握したらしい。僕はそこから逃亡した。後ろを振

り返らずに、元来た道を突っ走った。途中砂利に引っ掛かって何度も転倒したが、その度に秒速で立ち上がって駆け出した。舗装した道路に差し掛かった時は砂利道よりも走り易くなった。頭上で蝙蝠が通過したのを感じたが、今の僕にはそれに気付く余裕もなかった。兎に角逃げねば、あの老人に追い付かれる気がした。住宅街で周囲が少し明るくなっても気は抜けなかった。そして、自宅に飛び込んだ時には逃げ切れた安心感でドアを背に座り込んでしまった。駆け足になっている時は気付かなかったが、身体中のあちらこちらに鋭い痛みを感じた。シャツの右の袖を二の腕まで捲り上げると、肘に血が滲んでいた。顎にも痛みを感じたので、触れてみると血と砂が指に付着した。両脚にも痛みがある。すると、僕は何度も転倒したお陰で全身に打撲や擦り傷を作ってしまったのだ。やれやれと僕は仕方なく顔を上げた。丁度リビングから顔を出した母と目が合った。その後で母の悲鳴と叱責を浴びたのは言うまでもない。

翌日は午前十時から大学の講義があった。自宅から大学まで自転車で一時間以上は掛かるので、九時前に出発しなければならなかった。自転車を漕ぐ度に昨夜の傷が絶えず痛む。いつものように勢いよくペダルを踏んで大学目掛けて突進することができない。住宅街を抜けた所にある急な坂道を上る時は地獄だった。今朝は肌寒いのに、全身から汗が滝のように流れ落ちた。怪我をしているのだから両親に送迎して貰えば良かったのだが、生憎早朝から仕事があるようで、僕が起床した時には二人共既に出発していた。汗が絆創膏を貼っている傷口に染みた時、昨夜に遭遇した老人の姿が脳裏に映り出しては恨めしく思うのだった。

大学に到着した時、時計の針は九時五十五分を指していた。自転車を駐輪場に置いた後、猛ダッシュで講義室に駆け込んだ。同じ講義を受講する友人、月岡の隣に着席したと同時に、始業のベルが鳴った。間に合った。僕は額を机にくっつけて、溜め息を吐いた。机はひんやりとして気持ちが良い。月岡は隣でセーフと囁いた。友人のそうした気遣いも僕には清涼剤となった。講義が始まり、教科書をカバンから取り出そうとしたが、ない。部屋の机に置き忘れてしまったらしい。僕は本日最大かと思われる溜め息を吐いた。忘れ物をしたのは自分の責任だが、僕はこの時も昨夜の老人を恨まずにはいられなかった。

教科書は取り敢えず月岡から借りることにした。但し、食堂で月岡の昼飯を僕が奢るという条件付きで。月岡はそれ位ちゃっかりした奴だった。昼休みになると、食堂も売店も学生や教員達で溢れ返る。僕と月岡は長蛇の列に並び、食堂で注文するまでに十五分も掛かった。幸い、僕達二人には午後の講義がなかったので、時間を気にすることなく食堂でゆっくりしていられた。月岡は大盛りのカレーライスを口いっぱいに頬張った。僕は温かい蕎麦を啜りながら、月岡を上目遣いで見てよくそんなに食えるものだと思った。月岡が水を一杯飲んで、咀嚼したカレーライスを胃の底に流し込んだ後、僕に聞いた。

「なァ、夜野。講義終わったら聞こうと思ってたんだけど、顎の絆創膏どうしたんだ?」

月岡は僕が昨日怪我をして貼った絆創膏がずっと気になっていたらしい。僕は昨夜電照菊畑で遭遇した不気味な老人の話を月岡に話して聞かせた。すると、月岡は口を押さえてくっくっと笑い出した。僕は死ぬほど怖い思いをしたのに、何がそんなに可笑しいのか分からなかった。

「それでびっくりして逃げ出して転んで怪我するとか、そりゃねェわ」
「笑うなよ。本当に怖かったんだぞ。お前もあの老人に会ってみろ。そこに立っていられなくなるほど不気味だから」
月岡は机に突っ伏して声を殺して笑い始めた。僕は月岡の反応に腹を立てた。昨日の両親の反応も癪に障る。母は呆れ顔で「あんたは相変わらず怖がりなんだから」と言い放った。父はというと僕の話に一切興味がないようで、ずっと新聞の紙面ばかりを見ていた。僕はこの二人にも月岡にもあの老人を会わせたくなった。月岡は漸く落ち着きを取り戻したらしい。またカレーライスを口の中に運び始めた。咀嚼する時の顔はまるでハムスターのようだった。腹の底で煮え滾っていた苛立ちが、僕の顔に浮かんだ時には笑いに変わっていた。月岡はカレーライスを呑み込むと、僕に言った。
「俺ァ、てっきりお前が＜暴れ馬＞に襲われたのかと思ってたよ」
僕は聞き慣れない言葉を耳にした。
「暴れ馬？」
「あれ、知らない感じ？　最近この町で大騒ぎになってるんだよ」
月岡の話によると、＜暴れ馬＞は一ヶ月前くらいに町の北部の電照菊畑に出現したらしい。普通の馬よりは二回り大きく、全身が黒いために暗い所ではあまり見えないのだそうだ。＜暴れ馬＞が畑に乱入し走り回ったお陰で、菊は踏み倒されて売り物にならなくなるわ、電球は落ちて割れるわで大惨事となった。その畑を所有していた農家は数千万の損害を被ったそうだ。僕

はその農家が気の毒に思えた。＜暴れ馬＞はこの事件を境にして、その後何度も町に点在する畑に被害を与え続けたのだという。或る時は作物を食い荒らし、またある時は畑の設備を破壊した。やりたい放題に暴走するのだが、未だに捕獲されていないらしい。

「嘘だろ、警察。どうなってんだよ?」

「だよな。＜暴れ馬＞は決まって夜に来るらしいけど、その時間に待ち伏せしても来ないことがあるってよ。そこで諦めた時に急に畑に現れたりもするんだってな」

そのお陰で警察もお手上げ状態だ、と月岡は両手を上げた。

その後、月岡と少し談笑してから食堂で別れた。図書館に入り浸って本を数冊借りた後、僕は自転車を漕いで大学を出た。傷口は瘡蓋ができたこともあって痛みが少し和らいでいた。そのお陰で今朝とは打って変わった勢いで自転車を走らせることができた。急な坂道を越え、住宅街に入り、自宅に到着した時には時計の針は四時半を指していた。ドアの鍵は開いている。父はいつも夜に仕事を終えるので、母の方が帰宅したのだろう。僕は玄関に入り、案の定リビングにいる母にただいま、と声を掛けた。すると、母はいつもより真面目な顔で僕を呼び止めた。昨夜のことで何か気に障ることでもあったのかと思うと、僕は恐る恐る母の前に立った。

「星矢。あなた、いつも夜に散歩しているでしょう?」

僕は叱られるのを覚悟して、はっきりと頷いた。

「それね、しばらくは止めておいて欲しいの」

母のその一言に僕は拍子抜けした。

「何で？　夜が危ないから？」
「それもあるけど、近所で＜暴れ馬＞が出たらしいのよ」
僕は驚愕した。昼に月岡から聞いた例の馬がもう既に近所にまで襲来していたからだった。
「＜暴れ馬＞って、畑荒らしの？」
「ええ。でも、もう畑荒らしでは済まされないのよ」
僕は母の言葉の意味が分からず、もう少し母の話を聞いてみた。昨日の夜、僕が散歩に出かける前に近くの商店街でその馬が大暴れしたのだそうだ。馬は通り掛かった人たちを蹴飛ばし、店に乱入しては商品を踏み潰した。商店街はおよそ二十店舗で構成されているが、そのうちの七店舗が損害を被ったと言う。幸い死人こそは出なかったのだが、最悪で全治一年ほどの大怪我を負った人がいるらしい。
「警察からこの町に、夜の外出は控えるように注意されたわ」
母はいつもの言動からは見えないほど深刻な顔をしている。母が心配してくれるのはとても嬉しいことだが、僕は警察からの勧告が気に食わなかった。夜の散歩ができないからだ。
「＜暴れ馬＞って、神出鬼没なんだろ？　町全体に外出自粛を命令しなくても良いのに」
「万が一ってこともあるでしょう？　散歩なら朝や昼でもできるじゃない。大丈夫よ」
「夜じゃないと、気分が乗らねェよ」
「星矢！」
母の頭から鬼の角が立った。こうなった母には、いくら言い訳しても済まされないような気が

する。僕はすぐに土下座し、母との約束を守ると誓った後、すごすごと自分の部屋に戻っていった。

講義で出された課題をネットの共有サイトで提出した後、僕はベッドに身を投げ出した。天井を見つめながら思う。昨日の電照菊畑はまだ無事なのだろうか。例の老人に遭遇するのかと思うと、あの畑に散歩に行くのには抵抗があるが、それでも気になる。また、僕が歩いた畑道は一つの広場に通じていた。あの広場にも、僕が囲まれた畑とは別の光で溢れた園が見えた。また、何か車のようなものも佇んでいた。あそこには何があるのだろう。それを考えると、いつもの好奇心が働いてどうしても行きたくなる。僕は夜の散歩を禁止された、元凶である＜暴れ馬＞を恨んだ。奴は一体何がしたいのか、飼い主はどういう理由で奴を解き放ってしまったのか、てんで検討が付かない。月岡とその話をしていた時はあまり気にしなかったが、まさか自分の自由行動にまで影響が及ぶとは思わなかった。試しに以前購入した小説一冊を読破したり、人気動画サイトで好きな音楽を視聴したりしたけれど、矢張り気分が乗らない。外に出て、夜の空気を浴びたい。夜の音を聞きたい。夜の景色を見たい。夜だ。夜の空間が欲しい。

僕はベッドから勢いよく起き上がった。椅子の背もたれに掛けてあるジャケットを羽織ると、部屋を出てリビングに向かった。その時、母は丁度コーヒーを飲みながら某有名テレビ番組を見ていた。飲み物を買ってくると言うと、母は信じられないと言わんばかりの顔で反論した。

「駄目よ！　さっきの約束忘れたの？！」

僕は母の物凄い剣幕に尻込みしそうになったが、すぐ隣の自販機までしか行かないのだから大丈夫であることを伝えた。母は眉間に皺を寄せてしばらく考え込んでいたが、それもそうね、

と渋い顔で了承した。
「でも、危なくなったらすぐに家の中に駆け込みなさいよ」
「わかってるよ」
僕は軽快な気持ちで玄関を出た。夜特有の涼しい空気が僕の身体を包み込んだ。他の住民は警察からの注意に従っているためか、外には人っ子一人おらず、周囲はしんと静まり返っていた。しかし、僕にとっては静かな夜の方が好きだった。年越しイベントのカウントダウンの時のような騒がしい夜はあまり好きではない。自販機は自宅の二軒隣にあった。そこまで行くのに五分も掛からないが、短い時間でも夜を肌で感じることはできた。僕は自販機の前に着くと硬貨を入れ、一本のジュースを購入した。今晩は冷えるのだが、今は熱い飲料よりも冷たいジュースを飲みたい気分だった。＜暴れ馬＞がいつ来るかも分からないので、取り敢えずジュースを手に取るとそこからすぐに去ることにした。
不意に街灯の下を見た時のことだった。一人の人間が直立している。自分以外にも外出をしていた人がいたようだ。しかし、何の用でそこにいるのだろう。とにかく、長くそこに佇んでいるのは危険過ぎる。僕は周囲に＜暴れ馬＞がいないか確認しながら、そっとその人に近寄った。
「あの、こんばんは。すみませんが、もう早く帰ったほうがいいですよ。この辺りで＜暴れ馬＞が出るから」
僕はそう言い掛けながら、その人物を凝視した。黒い外套に山高帽子という出立ちの、小柄な男。
僕はギョッとした。もうすぐでジュースを地面に落としそうになった。身体の皮膚の裏側にま

で寒さが伝わってきた。両脚が面白いほどに震える。
「お気遣いありがとうございます。私は大丈夫ですよ」
老人はその皺だらけの顔を歪ませた。街灯の白い光で老人の肌は青白く映り、まるで黒服を着用した典型的な死神のように見えた。
僕は恐ろしくなって、すぐにそこから自宅まで駆け込んだ。自宅という安心領域に入ったものの、心臓はまだ恐怖に怯えて拍動を繰り返している。ドアを強く閉める音に驚いたのか、母が慌てて玄関まで走ってきた。僕は昨夜出会った老人が自宅の前まで来ていることを話して聞かせた。すると、母は鬼のような顔で僕を叱責した。老人が近くの住人かもしれないのに、ただ見た目だけで判断して逃げ出すのは失礼だということだ。母は僕を軽く押し退けると、玄関の外に飛び出した。老人が一人で外出していては危険だと思ったためだ。僕も母に続いて外に出た。ところが、街灯の下にあの老人はいなかった。僕と母は周囲を見回したが、矢張り老人の姿はどこにも見当たらなかった。おそらく帰路に着いたのだろう。母は老人が無事であることを願いながらリビングに戻っていった。対して、僕は老人がどこかで自分を見てはいないか、辺りに注意を向けながら家の中に入った。部屋に戻った時は窓に鍵を掛けカーテンを閉めた。自意識過剰になるのも考え物だが、老人はどういう手段で僕の自宅を知ったのか。それとも偶然そこまで辿り着いたのか。僕は老人が怖い。老人もまた＜暴れ馬＞と同様、神出鬼没だ。この先あの老人に遭遇した時、僕はどうすれば良いのだろう。警察に相談しようと考えたが、老人は犯罪まがいのことをしていないのでまだ何とも言えない。それに、母の言う通り僕は人を外見で判断しすぎて

いるところがあるかもしれない。老人とは昨日が初対面で、まだ彼のことを何も知らないのに、恐怖の対象として遠ざけようとするのは少々自分勝手だと思う。そう考えると、僕は幼い頃から何も変わっていない。ずっと怖がりで人見知りのままだ。僕は天井を仰いで幾度目かの溜め息を吐いた。昨日も今日も本当に散々なことばかりだ。

老人との騒ぎがあって二週間後のことだった。＜暴れ馬＞が遂に捕獲されたそうなのだ。地元の新聞によると、ある畑の農作物を食べていたところを発見され警察に通報されたのだと言う。その馬の正体は、町のN牧場から逃亡した若い雄の馬だそうだ。手綱を引きちぎったらしい。家畜の管理に不備があった牧場主はこれまでの数々の騒動に関して責任を問われている。

「全身が黒いって言われたのは、身体中泥に塗れていたからだって。その馬が一度沼に嵌まったからだって警察が言ってる」

月岡が豚キムチ丼を頬張りながら今朝の新聞の内容を話して聞かせた。

「取り敢えず、まァ良かったよな。農家は大変だけど、＜暴れ馬＞が捕まったら一先ず安心だ」

僕も月岡の言うことに何度も頷いた。しかし、僕の中には馬よりももっと重要な心配事が残っていた。あの老人とはもう二週間ぐらい遭遇していない。安心し切ったところで再会しないかどうか不安になって、あの日以来周囲を見回したりしていた。

「夜野も良かったんじゃねェか？　もう夜の外出できるだろ？」

「ああ、＜暴れ馬＞も捕まって夜に散歩しちゃいけない理由がなくなったからな。もう二週間

も待ってたんだぜ」
そう、僕は二週間も夜の散歩を禁止されていた。元凶が捕獲された今、僕は母から夜を歩く自由を取り戻した。久しぶりの散歩は今夜決行するつもりだ。早く夜が来ないだろうか。待ち遠しくて堪らない。
「夜野、嬉しい気持ちはわかるけどさ、笑顔がちょっと気色悪ィぞ」
月岡は顔を引き吊らせた。僕の顔には満面の笑みが浮かんでいたらしい。僕は何だか恥ずかしくなって、両手で口元をパッと隠した。
大学から帰宅し、自宅で夕食を取った後、一時間ほど寛いだ。時計が夜七時半を指した頃、僕は遂に夜という空間へと飛び出した。出発する前、母は渋い顔をしていたが、僕を止める理由は何もなかったようで、ただ「行ってらっしゃい」の一言を添えた。
僕は二週間前の夜に来た道をもう一度歩いていた。民家が一つもなく、ビニールハウスや畑が密集しているだけの農道。ほとんど舗装されていない砂利道。つい最近で一度しか通ったことがない道だが、夜の散歩を解禁された身としては懐かしい気持ちだった。やがて、ビニールハウスの先に光に照らされた道を見つけた。僕は宝物を発見した盗賊のように、向こう側に向かって走り出した。到着した僕を出迎えてくれたのは無数の光の玉だった。白い光の電球はまるで純白のフリルのドレスを着た年端のゆかぬ幼女のように見えた。畑道に差し掛かると、僕は純白色の畑と紅白色の畑の間を通り抜けた。
その時だった。後ろからボールがバウンドするような奇妙な音を聞いた。僕はハッとした。先

ほどまで浮かれていた気持ちが海の底に沈んだようだった。僕は思わず振り返りそうになったけれども、ぐっと堪えた。すると、僕の横を一つの黒い物体が跳躍しながら通過した。鴉の翼のような黒い外套。間違いない。あの老人だ。老人はこちらに気付く様子もなく、奥へと進んでいった。そして、広場らしき場所を通り抜けると、真向かいに見える道の方へ消えた。

辺りがしんと静まり返った後、僕は畑の方に目をやった。電球は知らん顔をして輝いてみせている。菊たちは光へ向かおうとして、僕の方には目もくれない。後には虫の音が響き渡っていた。明るい畑に不気味な空気が流れた。爪先から脳髄まで寒気が走った。僕の中で光を愛でる感情はいつの間にか消え去っていた。歩調は無意識に速くなる。

畑道の奥には広場があった。広場もまた色とりどりの光の園に囲まれていた。紅白色の畑の隣にはオレンジ色、オレンジ色の向かいは黄色、黄色の隣は赤だった。僕の口から溜め息が漏れた。黄色とオレンジ色の畑の前には、それぞれベンチが置いてあった。紅白色の畑の前には売店らしき屋台があった。ここは休憩所らしかった。

先ほどの奇妙な出来事への恐怖心もあって、僕は光に囲まれたこの場所でゆっくりすることにした。売店の方へ寄ってみると、そこには一人の男がいた。頭は薄毛で、腹は少しだけ出ている中年の男だった。店では菊茶が売られていた。一杯二百円という値段で、自動販売機の缶ジュースより少し高いものだったが、冷えた体を温めたかったので買うことにした。吊り下げられた一つの電球の下で店の主人は黙々と茶を淹れた。差し出された黄褐色の茶の中で小さな菊の花が顔を出していた。この茶の菊の花はここで育てられたのかと聞くと、これは別の産地で生産された

もので菊の畑に因んで売り始めたと話した。僕は黄色の畑のベンチに腰掛けた。そこで菊茶を口に含んだ。こびりついた恐怖心が洗い流されていくのを感じた。僕はまた溜め息を吐いた。

黄色も、オレンジ色も、赤色も、なんて暖かい色だろう。赤とオレンジの光で彩られた道を横目で見たその時だった。誰かが飛び跳ねながらやってきたのだった。漆黒の外套に身を包み山高帽を目深に被った鴉の老人。僕は小刻みに肩を震わせ、できるだけ老人の方から目を逸らした。老人は何やら店の主人と気楽な会話をしていた。老人は親しげな様子で話しかけ、主人も先ほどとは打って変わった明るさだった。二人は以前から知り合いだったのか、目は茶碗の小さな菊の花に向けながら考える。すると、足音がこちらに近づいてきた。そして、木が軋む音を立てて、ベンチが揺れた。僕はもう少しで茶を吹き出しそうになった。老人は茶を仰ぐと、大きな息を吐いた。どぎまぎしながら、僕はちらちらと老人の方を見た。

すると、一瞬老人と僕の目が合った。僕はビクッと体を震わせ、すぐに目を逸らした。しかし、もう遅い。老人はこちらに気づいたらしく、丁度鴉が泣き叫ぶような甲高い声で笑い始めた。

「おや、先客がいましたか。これは失礼。毎晩一人で来ていたもので。ここには私のような老人や若い男女が訪れますが、あなたは初めて見かけますねえ。何、初めてここを訪れるのですか？ それは、それは、あなたは運がよろしい！　いい場所でしょう、ここは。光に囲まれながらゆったりと流れゆく夜を楽しむ。売り物の菊の花を栽培するための畑でしたが、いつの間に人を惹きつけたんでしょうかね？　まあ、それはさて置き、この町ではいつから電照菊畑が開かれたのか

ご存知ないです？　あなたが生まれる十年前？　違いますよ、それよりもずっと前です。いや、あなたのご両親がお生まれになるずっと前です。終戦から二年後になりますね。ははは、驚きましたか。若者が驚く顔を見るのは何十年ぶりでしょう。

おや、失礼。先ほどから顔色が優れませんが、大丈夫です？　こんな気味の悪い老いぼれが話し掛けて、気分を害してしまいましたか。申し訳ない。おや、自分は大丈夫ですと？　無理はしなくてよろしいのですよ。大抵はあなたみたいな反応をする人が多いのですから。知り合いからは鴉のようだと呼ばれているのですよ。鴉よりカエル？　スキップをしていたから？　あなた、私が飛び回っていたところを見掛けたのですか？　ははは、元気な老人だと思いましたか。まだまだ若いと言われているようで、嬉しいですなあ。

ところで、あなたはどちらからいらしたのですか？　ほう、近くの住宅街から。昔にはなかったものですね。昔と言ったら、近くに村がありましてね、そこに住む子供たちがよくこの畑に遊びに来たものです。野菜の畑しか見たことがなかったその子たちは、電球がたくさん吊り下げてある畑が珍しかったようでした。光の園の中を駆け回る子もいました。電照菊畑を珍しいと思うような子はもういませんが、子供の元気さは今も昔も変わらない。ほら、今も大はしゃぎする子供たちの声が聞こえてくるでしょう？　懐かしいなあ、電照菊を初めて見た時の子供たちの瞳が。煌めいていましたよ。それは、光が瞳に映り込んだのか、彼らの目が元から光だったのか。今となってはわかりませんが。

おや、何ですって？　私がいつからここを訪れているのかですって？　ははは、先ほどの話を

聞いて気になりましたか。私は、戦争が終わって二年後の年からここに来ていますよ。電照菊畑が初めてこの町に開かれた時からです。そう言えば、あなたは初めて電照菊を見た時の記憶を覚えていますか？　子供の頃に、ですか。ほう、電球のある畑が珍しかったと。あの頃の子供たちと同じように。

ところで、あなたは何をしていらっしゃるのですか？　おや、失礼。言葉が足りませんでしたね。お仕事の方は何をなさっているのですか？　何、書店員を！　本には何より興味がありましてね、これこそ人間に人間たるための知識を与えるのだとか。あなたは本がお好きなのですか？　ほう、アルバイトですか。本をただ並べているだけと。いえ、人間に不可欠なものを扱うだけでも、大変ご立派ですよ。そうですか、実際には本を読んでいるのですか。心も穏やかになるのですか。今みたいに。是非とも本を手に取ってみたいものです。どうなさいました？　こちらからも質問をしてもよろしいかって？　先ほどから質問攻めにしてしまいましたね、遠慮なくどうぞ。本。そうですね、読んだことはございません。それだから、一層興味があるのです。私がどうやって電照菊について詳しくなったのか、それこそ本を読んで知ったのではないかって？　いえいえ、知人から聞いたのですよ。菊の花を育てている農家の方でね。おやあなた、何を以てそんなに不思議そうに見つめているのですか？　本を一度も読んだことのないこの老いぼれが、学識を持っているように見えるのはおかしいですか？　あなたが怪しく考えるのも最もなことです。しかし、私をそこまで気にするのは、あなたが初めてのようです。今まで出会った人々は、私の話の不思議な箇所を気にも留めませんでしたよ。いや、気にしない振りをしていたのかもしれない。

もし、そうだとすれば、あなたは他の人より正直者なのでしょうね。いいことです。だいぶ話が逸れてしまいましたね。実は、私は」

老人が何かを言いかけた時、暗闇の中で黒く大きなものが地面を蹴った。電車が線路を突っ走るよりも速く、力強い動きだった。僕はびっくりして通りの向こうを見た。どうどうと物凄い音を立ててやってくるそれは、馬のような形をしていた。ただ、それは真っ黒な影だった。人間でもなければ、動物ですらない。

＜暴れ馬＞だ。先日捕獲されたと言われたのは別の馬だった。あれが真犯人だ。

僕はあることに気づいた。影が通り去るとともに、電球が次から次へと消えていく。影が僕たちの前を走り去った。疾風が砂埃を掻っ攫い、僕の顔面に当たる。僕はぎゅうっと目を瞑った。風が止み、恐る恐る目を開けると、そこはもう真っ暗だった。僕は迷子になった幼児のように、辺りをきょろきょろと見回した。周囲の喧騒がつい先ほどまでの静寂を突き破った。畑の方で複数人の怒声が飛び交う。電球を早く点けるように指示する男、泣き叫ぶ子供、またかと溜め息を吐く店主、ざわつく電照菊。周囲の音が一つの雑音となって僕の鼓膜にぶち当たる。心臓はそれらに反応するように怯えた。僕は何とか今の状況を把握しようと努めた。あの影が電球を消したのか。そうでなければ、故障か。何も見えない暗闇では、目は役立たずだ。目を開閉し続けても、黒く広大な宇宙が広がっていた。

気になったことが一つだけあった。周囲の音は煩いくらい聞こえるのだ。複数人の気配を感じ

るのだ。僕とは遠くに離れていても、あちら側に何人かが動いているのを感じることはできるのだ。

隣にいるはずの、老人の気配だけ感じられない。

プツンと音がするとともに、全ての明かりが点灯した。白、赤、黄色、オレンジ、全ての光が目を眩ませた。畑の向こう側に数人の白い人影が見えたが、彼らは暗闇の中へ消えていった。子供たちはまだ泣いていたが、中には笑い声も聞こえた。その幼き声も闇夜に溶けていった。店主は何でもない顔で店仕舞いを始めた。僕は額に垂れた汗を拭った。夜風がひんやりと体に染み込む。寒いが、僕はそれがやけに落ち着いた。先ほどの騒動は夢だったのか、分からないくらい穏やかでいられた。僕は笑いながら隣をチラッと見た。

老人がいた。

僕はその瞬間、椅子から飛び上がった。老人は何事もなかったかのように茶を啜っている。僕は老人を奇怪なものを見るような目で見つめた。

「おや、どうなさいました？　そんな怖い顔をしなさるな」

僕は老人に先ほどまでどこにいたのかを聞いた。

「ははは、ずっと隣にいましたよ。他にどこへ行くというのです？」

停電した時、老人の気配を全く感じなかったことも話した。老人は少し考えてから答えた。

「ははあ、そうですか。私が消えたのですね」

老人は意味不明な発言をした。消える、とはどういう意味だろう？　気配を消す、ということ

だろうか。老人は電照菊を見つめていると、今度は僕の方を見た。僕も老人の顔を覗き込もうとしていたので、急に目が合ってどきりとした。
「あなたは先ほどの黒い動物が何かご存知ですか?」
僕は返事もせず、ただ首を横に振った。
「そうですか。初めて見るのですか」
老人は目を瞑り、また、静かに語り始めた。
「あの黒い動物は、生ける『闇』です。電照菊の季節になると、時々ああやって来るのですよ。あの手の『闇』がここを通りかかると、電気は忽ち消えてしまう。しかも、奴は気紛れなもので何の前触れもなく来ることもあれば、あいつの対策とは裏腹にやって来ないこともある。言わば、電照菊農家の敵ですね。」
老人はボロボロの歯を見せて笑った。生ける「闇」。闇が意思を持つなんて、ファンタジーじゃあるまいし。闇なんて、夜に人やものを取り巻く無限の空間だ。そんな摩訶不思議な現象が起こってたまるか。僕はそう言って笑いたかったが、あの黒い影のような〈暴れ馬〉の姿が頭に付いて離れない。
「私も同じようなものですがね」
僕はハッと息を呑んだ。老人は穏やかに笑っていた。その顔が不気味に思えた。
「私もまた、生ける『闇』なのですよ。光と闇とを自由に行き来できる存在です。電気は消えないのでご安心を。怯えていますね。まあ、無理もないでしょう。人間ではありませんからね。

私が他人に正体を明かすのは、今宵が初めてです。茶屋の主人はどうなのかって？　彼は何に対しても気にしない性質ですから、私が毎晩ここを訪れても、また来たというくらいにしか思わないらしいのですよ。

我々生ける『闇』は、光に当たったものから影ができるように、光の中では実体として動くことができます。ところが、反対に闇の中だと同化してしまうわけですから、姿が消えてしまうのです。私が消えたのもそのためですね。ほら、先ほどの暴れ馬も足音一つ聞こえないでしょう？

闇に帰ったのかもしれませんね。何せ、あの馬は気紛れですから一回通り掛かればまたやって来る。しかし、今宵はそんなことはないようです。

他にも闇が動き回っているのかって？　実を言うと、自分のことを生ける『闇』と認識しているのは私ぐらいのようなものです。私が勝手に名付けただけのことです。他の『闇』には自分が人間ではないという自覚がありません。闇に同化してしまうと同時に、意識まで溶けて無くなってしまうのです。人が眠りに落ちてしまうようにね。また、意識のないうちに光の中へ抜け出せるのです。人が眠りから覚めるように。

私も自分の正体に気付かなかった時は、何気なくここを出入りしていましたよ。ただ、ここ以外での記憶が全く無かったのは妙でした。ある夜のことです。その夜は長年連れ添った茶飲み仲間と語り合っていました。そいつはわたしと同じで、本に大層な興味を抱いていました。本を手に取りたい、本を読みたいと口癖のように言っていました。そして、遂に知り合いから本を借りられると目を輝かせていたのです。その夜は二人で帰ることにしました。そいつはいつも以上に

上機嫌でした。私に先立って飛び跳ねながら歩いていました。足袋に下駄を履いていましたから、砂利道で転ぶのではないかとハラハラしたのを覚えています。そいつに追いつこうとしたその時です。暗闇の中に入ったそいつが急に消えたのです。その時は私も驚きました。私は訳も分からず、そいつの名前を呼びました。返事は返ってきませんでした。私は、そいつもここ以外での記憶が無く、ここで借りた本を読むことにしたと話していたのを思い出しました。私は、もしやと思い手を暗闇の中に差し出しました。何と、手が消えたのです。腕も暗闇に差し込むと、それまでも消えました。光に戻すと、元通り手と腕がありました。私の手と腕は、先に消えたあいつは、消えたのではない。闇に同化したのだ。私は驚きました。自分という人間は、『闇』だったのです。記憶がこの電照菊畑以外になかったのは、脳まで闇に溶けていたからなのです。恐ろしかった。自分が人間ではないことを知ったのですから。その夜は消灯するまで畑に佇んでいましたよ。今まで無意識に光と闇を出入りしていた癖に、今度はそれが怖くなった。今となっては笑い話ですね。

消えていった私の茶飲み仲間はどうしたかというと、それっきり現れませんでした。一人で夜を過ごすようになった私は闇の向こう側を覗きながら考えました。あいつはもう来ないのではないかと。今宵訪れたあの暴れ馬のように、私たち人型の『闇』もまた気紛れです。一度消えて仕舞えば、いつ来るかもわからない。むしろ、自然に消えて無くなってしまうのかもしれない。私も闇に帰れば、いつかはあいつのようにならないとは限りません。もう光の中を歩けなくなる可能性だってあります。そう考えると、寂しくなりましたよ。

もうじきこの電照菊畑も消灯ですが、私は闇に帰らなくてはなりません。長く付き合わせてしまって申し訳ない。そろそろお暇しましょうか。では、また次の機会にお会いしましょう。いや、もしかしたらこれでお別れかもしれません。もし私が消えてしまえば、本に出会えなかったこと、それこそが心残りです。あなたを信頼のおける人として、一つお願いがございます。あなたが次にここに来る時は、本を一冊持ってきて頂けませんか？　闇として消える前に一度でいいから触れてみたいのです。『闇』として誕生した、私の念願です。私の願いが叶った暁には、あなたは私の一生の恩人になるでしょう。いいですか、本を一冊持ってきて欲しいのです。おや、そろそろ消灯ですね。あなたも早めにお帰りになった方がいいですよ。何しろ街灯の少ない土地にこの畑はありますから。一旦消灯してしまうと、真っ暗闇で何も見えなくなります。だから、早くお帰りなさい。では、また次の夜に。そして、さようなら」

老人はそのままスキップして行ってしまった。スキップする度に黒い外套が翻る様は、まさに鴉だった。老人の行く手には、先の見えない広大な闇の海があった。しかし、老人は躊躇しなかった。やがて、老人の小さな体は闇に溶け込んでいった。僕はいつまでも彼を見送った。茶店の主人が店仕舞いを終えたのか、屋台の明かりがふっつり消えた。もうじきこの電球たちも消えるだろう。僕は込み上げる熱いものを抑えながら、ゆっくりと立ち上がった。電球たちが風鈴のように、老人の双眸を輝かせたであろう光を揺らした。

僕は夜が好きだ。それでも、老人の姿を消してしまう闇夜を、今晩ばかりは恨むのだった。

羽影　憂（うえい　ゆう）／琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科二年

詩部門

詩部門受賞作

胎児の唄

前川　真美

死にたい、ではなく
生きていたいわけでもなく
ただぼんやりと
吸って吐いてを繰り返す

心臓を動かしているのは
私の意志ではない
止められるわけでもないが
それでも
私の意志ではないことは伝えたい

日向と日陰の狭間にいるような
そんな気がする
聴きたくもない音が
鼓膜を叩いてやまない

好きが一つ増えるたび
嫌いが二つ増えていく

晴れているのに雨が降り
雨が降っているのに晴れている

音の流れないイヤホンを耳に
今日も私は
胎児となる

前川　真美（まえかわ　まみ）／琉球大学国際地域創造学部国際地域創造学科四年

詩部門佳作

獣

葬　ヤマメ

恋、モノクロの葬列に似て非なるもの
地獄の淵にあって狂おしいほどいじらしいもの
夜毎訪れる喧しき騒ぎ（あぁ、から騒ぎ！）
のたうつ恋情は叫び散らし
人の皮を被る獣が、目を開く
私はあなたと結ばれたい（あぁ、結ばれたい！）
かつて写真の上澄みに残したあの虚構は
魂抜きの魂の模写
本当はあなたが大好きです
どうか、どうか許してほしい
✝神への祈り✝

迷える子羊ここに極まれり
眠れぬ羊ここへ集まれり
手淫の祈り・下卑た懺悔
彼女の笑顔に恋をすると
恐ろしい轟音と共に
私は断罪されて
しまうのです
ハートの傘の下、私とあなた、肩を寄せ合い
【友情】を、育む
どうして
所持を許されない愛情の行方
「あなたは病めるときも健やかなるときも
彼女への愛を棄て、忘却し、生涯嘘を貫き通すことを、
誓いますか？」
誓わないと、殺されるんですか？
「彼女らの愛欲は存在し得るか？」
しません、（何故？　するだろう）
＝＝＝何らかの差別＝＝＝

なぜ彼女らは愛し合うのか、ではない
なぜ私たちは愛失くして生きられないのか、を問うべきだ

交わる視線に愛の賛歌を
黒板に滲む私たちの名前に、人並みの♡を
（誰も、石を投げないで）
重ねた手には何の罪も無い
愛なんてどれも美しく、薄気味悪いものだろう
だからどうか、どうかお許しください
眠れぬ夜に彼女を夢想して、私は何度も熱を擦る
彼女の笑顔に抱く愛を
許してほしい（そう、誰もがそうであるように）
ああ、愛するあなたよ
ああ、ああ
　懺悔の羊ここに果てり

果てた私は、己の誤った姿に嫌悪し、
泣く、

獣のように

葬　ヤマメ（とむら　やまめ）／沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科四年

詩部門佳作

カルテ

綱取　汐音

おはよう　おやすみ　さようなら
——消え行く記憶は誰のもの？

はい、今日はいつもより気分が良くて。はい、薬はきちんと呑んでおります。
ベッドにも、すぐに入りました。昨日もぐっすりとね、ほんとほんと。

——目を閉じて、思い出していた。迫る空の痛みに満ちた青を。

まあ、少しだけですけれどもね。いえ、そんなのは一瞬ですよ。
すみません、カーテンを閉めてくれますか。この部屋は、どうも眩しくて。

――呼吸の仕方も忘れ、膝を抱えて。光の射さない部屋に独り。

はあ、耳鳴りは続いてますけども。はい、あれから吐いてはおりません。そうそう、健康そのものです。嘘じゃありませんよ、ほんとほんと。

――この世界のどこか、まだ歪みない場所を探して。やまない声に耳を塞ぐ。

あの、こんな問答に意味はありますか。いえ、何も変わりはありません。そのですね、薬のことなんですが。もすこし、減らせはしませんか。

――夜明けには背を向けて、日の出には目を伏せて。また今日を繰り返す。

いえ、どうしてそんな言い方をするんです。その、子供相手じゃないんですから。そうですか、あの人がそんなことを。年寄りの戯言ですよ、ほんとほんと。

――書き綴られた幻想は、もっとずっと優しくて。まだ僕は歩き続けてる。

ええ、もうすっかり治りましたよ。ええ、興奮なんてしてませんとも。

なんですか、離してくださいよ。病気なんかじゃありませんよ、ほんとだってば。

――あの場所に辿り着けたなら、そう。きっと僕は、あと少しだけ息が出来るから。

何にでも名前をつけなけりゃ、安心できない世の中ですか。
後ろ指をさしてさされて、あいつはこうだと決めつけて。
得体の知れない僕達は、そうでもしなけりゃ怖いんですか。
戦いたくなどありません。小さく静かに、それでも生きてる。
それでいいでしょ。

おはよう　おやすみ　さようなら
かじかんだ指先で、そっと眠剤を流しに捨てた。

耳鳴りは、やまない。

綱取　汐音（つなとり　しおん）／琉球大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程一年

詩部門佳作

盲目の巨人

天海　薫

我々は長い道のりを歩んできた。
黒い空を見上げ、あの子は何を思うか。
京の都の山が紅く染まる秋ごろ、
豪州の森は赤い炎に包まれる。
黒い泥の中で、彼らは何を思うか。
富士の高嶺に雪が降り、
大洋の底に塵が積もる。

白い海を見て、あなたは何を思うか。

夜のネオンはサンゴのごとく輝き、
昼の光でサンゴは白く透きとおる。

海を見つめる子どもは問う。
絵本にあった群青の大海は何処に。

陸を見つめる鯨は思う。
記憶に眠る万緑の大陸は何処に。

バベルの塔はいらなかった。

いつしか雲よりも高くなった巨人は、
長い道のりを歩み続けている。

巨人が歩む母なる大地。

盲目の巨人が歩んだ道に、何が残っているだろう。

我々は長い道のりを歩んできた。
終わりなき破壊の道を。

天海　薫（あまみ　かおる）／琉球大学理学部海洋自然科学科二年

詩部門佳作

友達と僕

宮里　うつ

「芸人になる」と六千円の手持ちで東京へ発った友人
ようやく名前を知った時にはこの世にいなかったあの娘
罪を犯し逮捕歴がついて先が見えなくなっても強く生きる友人
片親を亡くし屋台で汗水垂らして働く友人
お金も時間も親も持っている僕
何も持っていない僕

宮里　うつ（みやざと　うつ）／琉球大学人文社会学部人間社会学科三年

選評

選評は応募原稿原文に基づきます

選評【小説部門】

〔びぶりお文学賞選評〕

国際地域創造学部　西森　和広

いつものように、各作品へのコメントを記します。

『邂逅　ｓｉｎｃｅ１９７２．』は、「小さな」沖縄で生きていることへの鬱屈を抱えた、ある女学生が夏休みに体験した不思議な出来事（あるいは夢？）の物語。自分を抑圧しているように思われる母が、実は自分と同じような鬱屈を抱えて生きて来たのであろうことに気づかされる。古いカメラのシャッターを切るたびに時間を越えるという物語が上手な筆致で描かれています。映画的で、思わせぶりな終わり方も含めて、どこかで見たような感もなくはないのですが。沖縄の歴史や状況にも目配りがされていて好感が持てます。言葉使いに注意してほしい箇所を挙げておきます。「現代の金網よりも、簡素的に作られていて」（十一頁）とありますが、「～的」の使用は要注意です。「簡素に作られていて」で十分です。「分が悪いことに母親が病気で寝込んでいた」（十八頁）というのもいかがでしょうか。「分が悪い」は、勝負などで「形勢が悪い」という意味で使われます。この場合は「間が悪い」、「タイミングが悪い」などでしょう。また古いカメラのことを「フィルムカメラ」と登場人物たちに呼ばせているのは、若い主人公であれば分かりますが、祖母がそう呼ぶのはあまり自然とは思えません。カメラがフィルムなのは当たり前だっ

たはずですから。

『ゆきのとり』は昔話。二人の登場人物のそれぞれの視点から、貧しい農村の生活の姿が淡々と描かれます。甲六の章、佐吉の章と続いて、再び甲六に戻るのですが、戻るのではなく、二つの章で上手くまとめるのがより良かったのでは。最後に雪の結晶に関する一節で締めくくるというのはよく考えたところだと思います。短い段落が多いのが気になります。一文だけで一段落というのも目につきます。内容のまとまりを考えて、もう少し息の長い文章を書くことを意識してほしいと思います。

『破々親』は、自殺した母親から受けた体験の記憶に苦しめられる若い画家の独白の物語です。モデルとなった女性との交流を通して、その苦悩から脱却できるのか、といった点が物語の軸でしょうか。主人公には、「母に無理やり犯された息子」で、「二十代半ばにして名声を得た画家」という設定がなされています。どちらか一つでも、そうは無いであろうと思われます。それが両方となれば、相当に特異な事例です。これをありそうな物語に昇華させるのは容易ではないでしょう。「母との相姦関係の記憶に苛まれる、画家志望の若者」なら、まだありそうですが。少々誤字などもあり、言葉使いや用語にも堅いところがあるようです。少し肩の力を抜いてみてはどうでしょうか。

『また、君に会えたら』は、ガンに侵されて余命いくばくもない妻であり母である女性の独白（手記？）ですが、最後だけ夫に語り手が交代します。全体はよく書かれていると思いますが、最後の夫による付記が特に説明もなく引き継いでいるのが落ち着きません。作品の性質にもより

けりですから一概には言えませんが、夫の説明が最後（あるいは冒頭）にある方が落ち着くとは思います。段落の付け方に注意してください。人物の発話の後で必ず行変えをしなければならないわけではありませんし、またもし変えるのなら段落を別にしないといけません。

『惑星さんへ』は、小説投稿を目指して苦しむ作者自身の告白そのものが描かれます。本人も自覚するように、作品が小説にはなりきれないでいる、その葛藤そのものが語られるという、これはこれで小説に成り得るテーマではありますが、質量とも物足りないのもその通りです。言葉使いに少し注意。「高校受験を受ける際の願書」（二頁）など、気になる箇所があります。また、「十月二九日」とある一方で、「十二時二十四分」（同頁）となっています。漢数字の表記、特に西暦年などは悩むところです。いずれにせよ統一性を持つことです。

『オートフィクション』は、心（精神）の障害を扱った物語。個人的な経験もあることなので、興味深く読みました。全体にしっかり書かれていて、著者の成熟を想像させます。作品の最後に、作者が登場して作品の意図などを説明します。果たしてそれが必要かどうかは疑問ですが、意図はよく分かります。段落のつけ方などに注意すべき箇所が見受けられます。言葉使いで気になった点を一つ。主人公は自分の両親（のいずれか）を指して「親」とよく言っています。これが友人や先生、その他の人々との会話であればよいのですが、果たして自身の弟との会話中でもそう呼ぶものでしょうか。「お父さん、お母さん」などが自然では。

『パッチワーク、美少女。』の、主人公の青年はゲームセンターで見つけた青い髪の少女人形に妙に惹かれ、それを手に入れます。「彼女」は、かつて彼が創作ノート（小説執筆のための？）

の中に記していた少女のキャラクターに似ていたのです。やがて、かつての友人からの誘いを受けて主人公は再び創作に向かう、というところで物語は閉じます。「青」や「鳥」が象徴的に登場するのは、やはりメーテルランクの『青い鳥』から来ているのでしょうか。素直な一人の青年の物語がしっかり綴られており、悪くないと思います。「中坊以来」（六頁）という表現がありますが、「中学以来」の誤りでしょうか。

『電照菊と「闇」』は怪異譚。電照菊の畑を背景に、「闇」の権化である暴れ馬や老人が登場します。「闇」に惹かれた主人公はその老人から話を聞きます。老人の語り口などの文章は達者なものです。最後に何かもう少し深い詠嘆が残るようであれば、成功ですが、それが難しいところですね。闇の生命とは何か、戦争との関係は、などとあまり詮索させるような筋立ても粋とは言えないかもしれませんが、もう一つ何か想像をたくましくさせるような織り込みがあれば。「あいつの対策とは裏腹に」（二十一頁）の「対策」の意味がよく分かりません。

『かわく肌』は読ませます。女性同士の性愛が官能的に、しかし決して露骨にはならないようなタッチで語られる場面などは、技量を感じさせます。それだけに注文も色々無くはないのですが。女性の書き手と思わせる内容で、男性側の内面には全く触れられていません。それはそれで仕方ないかもしれません。子供を持たないという選択をする夫婦というのはけっこう多いのですが、性交渉も無しというのは、少なくとも若いカップルではやはりかなり特別で、当然女性の側だけでなく、男性側にも様々な思いがあるだろうと想像されます。本作のカップルも、男性にも相当の物語が秘められている気がします。もちろんそれが主題ではないのですから、そこまで描

く必要はないのですが、何かそういった影を暗示させられればより深いものになるのでは。また、主人公は子供を持たないという意志を両親に正直に伝えているようですが、果たしてそうするものでしょうか。個人的な経験からも思うのですが、こういった事項は適当にかわしてごまかすのが一般的ではないでしょうか。これも一種のカミングアウトと言え、昨今は珍しくもないのかもしれませんが、やはり少数派でしょう。当然それに対する様々な反響、反対が予想され、ひいてはそれが自身の性向自体についてのカミングアウトの必要を生じさせる可能性まで出て来るかもしれません。正式な結婚という形を取ること自体も困難になるかもしれません。こういったことは十分に想定され、それを心に秘めておきたい人であればそのような危険を冒さないのでは。またもし公然とそれを披露できるような人であれば、そもそも本作のような物語は起こらなかったでしょう。あくまでも私の感覚ですが。他に、語句の訂正を要する箇所もありますし、段落のつけ方の気になる箇所（特に人物の発話の後）もあり、まだまだこれからという感は確かにあります。とはいえ、将来性を感じさせる出来栄えであると思います。

最後にひと言。各作品のコメントでも触れましたが、今回は、段落のつけ方が気になる作品がかなり見られました。特に、人物の発話の後で行を変え、しかも「～と言った。」というような文を続けるというような書き方が目立ちました。発話の後の説明的な付け足しの文のために行を変える、つまり段落を変える必要はありません。行を変えるということは、そこで段落をつけるということであり、それならば、明確に前後の段落の文章は分かれていなければなりません。ひょっとして昨今はこのような書き方が、例えばインターネット上の書き物などで許容されてい

るのではないかと心配になります。とにかく名作と呼ばれるような定評のある作品を是非手本にしてほしいと思います。

（にしもり　かずひろ／国際地域創造学部教授）

第十五回びぶりお文学賞選評

村上　陽子

今年度、小説部門には九作品の応募があった。総じて高い文章力を有する書き手による作品であった。しかし残念ながら、誤字、不要なスペース、文意の不明確さ、段落構成の不備も多く見受けられた。応募者には、自身の作品を書き上げた後に少し時間を置き、細部に至るまで確認する習慣をつけてもらいたい。書き上げた直後の作品をざっと読み返すだけでは発見しにくいミスも、時間をおけば客観的なまなざしで拾い上げることができるはずである。

正賞に選ばれたのは「かわく肌」である。結婚はしたもののパートナーと性交渉を持たない選択をした若い女性を主人公としていた。悩みながら結婚生活を続ける主人公は、かつて思いを告白してくれた旧友の女性と再会し、逃避行に至る。主人公の状況や旧友との関係などがよく練られた上で書かれ、鮮やかな展開を見せていた。また、ふたりの身体的接触に関する描写は繊細な比喩に満ちており、優れた表現となっていた。

欲を言えば、「私」との関係をパートナーのコウキがどう思っていたのか、本当に「私」は彼に負い目を抱く必要があったのかという点をいま少し掘り下げてほしかった。しかし、限られた紙幅のなかで、ふくらみのある、微細な世界が展開されていたことを評価したい。作者の葬ヤマメ氏は、昨年度惜しくも正賞を逃し、佳作を受賞した。昨年よりも一際磨きがかかった作品世界を構築し、正賞受賞に至ったことを選考委員として心からうれしく思う。葬ヤマメ氏の今後の活

躍を期待したい。

佳作となった「邂逅 ｓｉｎｃｅ１９７２.」は、選考会においてもその構成の巧みさ、まとまりの良さが高く評価された。現在を生きる大学生である主人公が、母が若い頃に使っていたカメラのシャッターを切るたび、一九八〇年、一九八八年、一九九〇年と時間を遡っていく。過去の世界で主人公は、自分とよく似た母自身に置き代わり、母の人生を追体験していく。この設定はおもしろく、また、過去の沖縄の状況についてよく調べられていてリアリティがあった。特に、「あーすまちゃー」と呼ばれた殺虫剤散布車をめぐる場面は読み応えがあった。

難点としては、その構成の巧みさゆえに小さくまとまりすぎたことが挙げられる。母の人生をたどらせるカメラの不思議が主人公の生きる先の未来と結び付けられることで先の展開が予想可能になってしまった部分もある。主人公が本当に自分の「現在」に戻れるかという不安や、偶然遭遇した少女の存在、主人公にとって抑圧的な態度を取る「現在」の母の思いなど、掘り下げていくと小説が豊かなふくらみを持ちそうなディティールがあちらこちらに潜んでいただけに、全体のまとまりを優先してしまったことが惜しまれた。本作は作者・二藤氏の充分な力量を示す仕上がりとなっている。今後、作者の手によってさらに勢いのある作品が書かれることを望んでいる。

同じく佳作となった「電照菊と「闇」」は、独特の雰囲気があっておもしろく、読者を結末まで引っ張っていく力があった。不気味な雰囲気を持つ男が実は「闇」そのものであったことが明かされる結末は説明的で、駆け足の描写になってしまっている。しかし、本年度の応募作品の中

でもっともエンターテインメント性に富んだ作品であったと言える。また、電照菊という沖縄の風景を用いながら、沖縄らしさにこだわり過ぎず、夜を思わせる登場人物の名前や、標準語的なしゃべり方を採用している点は興味深かった。若い世代の作者にとっては、これが当たり前の選択であり、書きやすいかたちなのかもしれない。羽影憂氏の作品はミステリー調でもあり、ライトノベル調でもあった。多彩なジャンルで活躍できそうな持ち味と自由な発想を生かしていってもらいたい。

残念ながら選外となった作品にも触れておきたい。「ゆきのとり」は、優れた文章で彩られた、雰囲気のある作品であり、その点は選考会でも高く評価された。また、雪国の生活や冬の仕事についてよく調べられていた。しかし途中で視点人物が変わってしまったことで、作品全体の描写がやや説明的に流れ、浅くなってしまった点は惜しまれる。特に、言葉を喪失していくという原因不明の病については、作品全体の重要な伏線であったにもかかわらず、その伏線が回収されることなく中途半端に終わってしまったという印象を受けた。

「破々親」は、母親との関係において傷を負い、女性全般に嫌悪感を感じてしまう若き画家が主人公として設定されていた。よく書けているところもあるが、主人公が二十五歳という若さであることや、デビューのきっかけなどは奇をてらいすぎた印象がある。画業のスタイルや生活のあり方などを見ても、画家という職業・生活に対するリアリティがあまり感じられなかった。モデルとなる女性や、主人公の母の人物像はおもしろく、魅力的なキャラクターとして造型されていた。一方で、主人公の父の造型がそれに匹敵する重みを持ち得なかったことは残念である。

「また、君に会えたら」は、余命宣告をされた母親と遺される父子の時間を書いたものであり、嫌味のない文章と素直なストーリー展開に好感が持てた。しかしその分、突き抜けた魅力には乏しかった。特にラストシーンで母から父へと急に視点の転換が起こることと、「君」が何を指すのかが不明瞭なかたちで終わってしまっていることは残念であった。今後、ありがちなストーリーから脱却する工夫を凝らしてみてほしい。

「惑星さんへ」は、作品内で自嘲的に語れてもいたが、準備不足が感じられる一編であり、誤字も目立った。他者の創作物にインスパイアされ、自らも創作を志すというのは多くの人の経験することに違いない。それは、「私」に近しい誰かへ、「私」の体験を届けたいという切実な衝動を伴うものであるだろう。しかし、その衝動を小説という作品にしていく過程には、やはり時間が必要であり、自己に向き合い、言葉を練り直すという作業を積み重ねなければならない。そのような時間と手間をかけて、「私」を語る言葉を構築してみてほしい。

「オートフィクション」は、タイトルの通り、作者自身が主人公として語ることの可能性にかけた作品であった。しかしフィクション性には乏しく、幼少期から成人した現代に至るまでの時間軸の長いエピソードを短編のなかに収めたため、説明的な描写に流れてしまった箇所も多かった。書き手にとってオートフィクションという手法を用いることに大きな意味があったことはよく理解できる。しかし、短編小説で一人の人間の人生をオートフィクション化するのは難しい。本作のアイディアは、虚実が錯綜する世界で、語り手の葛藤により深く向き合うことが可能な、長編小説に適したものであったのではないだろうか。

最後に、「パッチワーク、美少女」に触れておきたい。文体に特徴のある書き手で、高い文章力を備えている。しかし、小説の展開としては思い切りの悪いところがある。主人公が過去の自分を捉え直し、新たな未来に進もうとしている点は評価できるが、主人公自身の「黒歴史」への恥の意識が先行してしまって、中学時代に何があったのかという肝心の問題が描かれていない。それは、読者にとってはもどかしい印象を与える。構成を整える力を磨き、次回さらに上を目指してほしい。

本年度で、審査に加わって四年目となった。正賞該当作なしの第十二回を除くと、第十三回、第十四回、そして第十五回と、沖縄という要素がほとんど見られない作品が連続で正賞を受賞することになった。特に本年度の正賞は、関西弁のせりふや電車など、沖縄での生活のなかではリアルに触れることが難しい場面を不自然さなく描写し、作品世界のなかで有効に用いていた。

沖縄は、県出身者・在住者に応募者を限定する文学賞がいくつも存在する県である。そのような賞を狙うとき、自分なりの沖縄を描かなければと応募者は強く意識するのかもしれない。無論のこと、自分たちが生きる場所の歴史や現実、その場所で培われた経験に向き合うことからは優れた作品が生まれ、「沖縄文学」はそのような作品によって豊かに彩られてきた。しかし、びぶりお文学賞受賞者たちは、そのような意識を軽やかに乗り越え、沖縄にしばられることなく、いまの自分が書けるもの、書きたいものに自由に向き合っているように思える。自分が書きたいテーマを見つけたとき、それを表現するのに最適の舞台や時代、登場人物や言葉遣いはどのようなものか、深く考えてみてほしい。小説の効果としてそれらを捉え直すとき、書き手にとっ

ての書きやすさ、自然さを超えた魅力が生まれるのではないかと期待している。模索の上で選ばれた表現は、その作者の覚悟やオリジナリティを示すものとして輝きを放つはずである。

（むらかみ　ようこ／沖縄国際大学総合文化学部准教授）

第十五回琉球大学びぶりお文学賞（小説部門）選評

高瀬　裕人

本年度も「琉球大学びぶりお文学賞」（小説部門）の選考に加えていただいた。昨年度もそうだったが、応募作品を読むことができるというのは、一人の読者としてやはり楽しいものである。本年度、小説部門には、九作品の応募があった。本年度もオンラインで開催された選考会議において、小説部門の選考委員の先生方との協議を経て、正賞に「かわく肌」を、佳作に「邂逅ｓｉｎｃｅ１９７２．」と「電照菊と「闇」」の二作品を選出した。以下で、これらの受賞作を含めて選考にあたって感じたことを記しておきたい。

まず、正賞の「かわく肌」についてである。この作品は、作者の表現力と構成力が光る作品である。都心部から離れた閑静な住宅街に住む主人公の私は、私からのある提案を受け入れてくれた夫のコウキと一見すると穏やかに暮らしている。ある日、私は高校時代のクラスメイトであるユウから久しぶりに連絡を受け、再会する。そこから私とユウという同性の二人が新たな秘密を共有していくという物語はどんどんと展開されていくことになる。そうした展開のなかにおいて、私とユウの濃密なつながりを描き出すとともに、ユウからは決して見えない私の心の揺れ動きもしっかりと書き込まれている。こうした読み手をどんどんと作品世界へと引き込んでいく展開力も、この作者の文学創作の力量の高さを示しているのだろう。まさに「琉球大学びぶりお文学賞」の正賞にふさわしく、読ませてくれる作品であると感じた。

次に、佳作の「邂逅 ｓｉｎｃｅ１９７２」についてである。冒頭で描かれている主人公の私の地元沖縄への思い、一緒に暮らす母とのやりとりやその際の行動、展開上の鍵を握るカメラなど、いずれも具体的に書き込まれており、読み手がいきいきと作品の世界を想像するのを助けてくれる。いずれの描写も作者の豊かな取材をもとづくものあることが感じられ、またそれをいかした表現力の高さを感じることもできるものであった。私がカメラのシャッターを押すたびに、母親の過去をたどるという形で物語は展開されていく。そこで目の前に広がる沖縄やそこに生きる人についての豊かな描写で描き出されている。それらを通して、読み手もまた、私とともにあらためて変わったもの、変わらないもの、そして沖縄の過去と現在について考えるように誘ってくれる作品である。作者の取材力と表現力をさらに磨きをかけてよりダイナミックな作品を創作してほしい。

さらに、佳作の「電照菊と「闇」」についてである。夜の電照菊畑を舞台とした物語である。主人公である大学生の月野星矢は、夜に対して幼いころは恐怖を感じていたが、いまは新しい発見を期待して夜の散歩を日課とするという設定である。ある夜、散歩に出かけた月野は、謎の老人と出会う。時を同じくして、彼の周りでは、〈暴れ馬〉が出没し、電照菊畑や町を荒らし、人々を困らせるという噂が流れる。〈暴れ馬〉や謎の老人の正体は何なのかを考えながら読み進めることになる。しかし、謎の存在であった老人が、〈暴れ馬〉のことや、自分の正体までをすんなりと語ってしまうところに物足りなさを感じたというのも正直なところである。どこまで語らせるか、あるいは語らせないのかという点をさらに洗練されるとよりよい作品になっていくものと思う。

ここからは、今回は残念ながら受賞には至らなかった六作品についても感じたことを記しておきたい。「ゆきのとり」は雪国を舞台とした作品である。情景はしっかりと書き込まれており、作者の力量の高さを感じた。主人公の甲六や妻のすずのように、文字が読めない者が「声」を奪われるというところもなかなか考えさせてくれる。伏線を張り巡らし展開した作品だったが、より効果的なものになるように整理されていくと、よりよい作品になっていくだろう。「破々親」は、母親から受けたトラウマを抱えた画家の水野の物語である。彼の作品のモデルを務めた椿とのやりとりを通して、水野がそうした過去と決別していくのを描いた物語である。結末までの展開を含めてもう少し工夫されると読みごたえのある作品になるのではないだろうか。「また、君に会えたら」は、末期がんの母が家族のことを想いつつ必死に闘病生活を送る物語である。母の人物像を表すかのようなやわらかな表現が使われており、全体的に読みやすい。一方で、全体として物語の深まりを感じることができなかったのが残念なところである。父へと視点が展開され、「また、君に会えたよ」というセリフで締める結末の工夫や、展開の鍵を握る潮の匂いや、季節の移ろいを表現した草木の香りなどの描写のより効果的な位置づけができれば、より深まりのある作品になるのではないだろうか。「惑星さんへ」は、創作への強い想いを抱きつつも、自信がもてない一人の学生の回想である。本作品は分量が少なく、作品全体として物足りなさを感じてしまう。構想や展開を練ったり、設定をしっかりと書き込んだりするなどして、作品を厚みあるものにしていってほしい。「オートフィクション」は、海野佳奈多の物語でありつつ作者のオートフィクションとされる作品である。一つひとつのエピソードを重ねたときに、

全体の意味が見出しにくいというのが正直な読後感である。「あとがき」も含めて、説明的になりすぎることなく、「私」語りの可能性を追究していってほしい。「パッチワーク、美少女」は、主人公である村崎が自分のなかに抑圧していた過去を掘り起こしていく物語である。一つひとつの出来事のつながりが見出しにくく、やや深まりにかけると感じてしまった。それぞれの出来事がもうすこし効果的に関連付けられると読みごたえがある作品になるのではないだろうか。

最後に、昨年度とは異なるとは言え、いまだコロナ禍が続いている。そうした中においても、本年度もまた若き作者の方々が文学の力を信じ、ひたむきに文学創作に取り組まれていることを感じることができた。一人の読者として、そうした場に立ち会えたのは、なにより幸せであった。今後も、この琉球大学びぶりお文学賞が、若き作者たちが自分の力を信じ、磨いていくきっかけであり続けることを願っている。

（たかせ　ゆうじん／教育学部講師）

選評【詩部門】

共同体を生きるけもの

宮城　隆尋

人間は社会的動物だと言われる。動物にも社会性はあるが、人間はより獣性から遠ざかるように進化してきたはずだ。共同体をつくり、よりよく生きることを追求してきた。しかし社会は時に弱肉強食を強いてくる。よりよく生きるための共同体が不完全である、または人の中に獣が生き続けているためかもしれない。人との関わりによって生じる摩擦が重圧となり、個を壊してしまうことがある。集団からはぐれることで個が破壊されたのか、それとも集団の中で破壊された個が孤立しているのか。一方で「よりよく生きること」に縛られることで自らの不幸に気づくことができたとしたら、それは人として幸せなことなのではないかとも思う。

それらの問題意識と関連しているかどうかはわからないが、「カルテ」（綱取汐音）という詩がある。分裂し、リンクする二つの主体が登場する。分裂しなければ自己を保つことができない人を生んでしまうような社会は、狂っていると思う。ここで個を壊しているのは規範だろう。

どのようにあるべきか。生きるべきか。これは社会に決められがちだが、自分で選び取ることができれば、それほど貴重なことはない。終結部、必要だとされていた眠剤を捨て、耳鳴りはやまない。詩の主体は社会に渡りを付けることをやめたようだが、これは自殺行為だろうか。

わたしにはそうは思えなかった。あまりにもそのまま描きすぎていて独自の展開に乏しいともいえる作品だ。しかし愚直に、読み手にそのまま手渡す描き方もあっていい。

選外だが同じ作者の「さよなら、ブルー・プラネット」という作品には違ったよさがあった。〈真空に響け、トラヴィアータ〉という一行がある。ヴェルディの歌劇「椿姫」の原題「ラ・トラヴィアータ」は「道を踏み外した女」だ。惑星を探査する人工衛星が役目を終えると、その先に定められた軌道はない。道のない真空の海を、果てに向かってただよう衛星の姿を思わせる。未知の存在へ向けたメッセージを携え、限りなく広がる闇を旅する。絶望に囲まれて生き続ける希望を描いているようで、地球上で絶え間なく続く人の営みを照らしているように思える。最終行、闇に向かって放たれる〈おはよう〉の言葉が力強い。

人間は共同体をつくり、よりよく生きる道を模索する一方で、いまだ獣でもある。人間が獣であるということは、わたしも獣である。そういう視点で自己に向き合った詩が「獣」（葬ヤマメ）だろう。言葉の扱いが投げやりにも見えるが、正直でなければできない書き方だと思う。欲望に突き動かされ、果てた自己を嫌悪し、泣く姿もまた〈獣のよう〉。自己対象化の視点を鍛える過程で、露悪と紙一重となることもある。恥部をさらすような思い切りの良さは、誰にでもあるものではない。これが悪ふざけなどではないことは、選外だが同じ作者の「ふれる」という作品を読んで理解できた。「獣」とは対照的な落ち着いた行の運びで、終結部に〈触れる日々の訪れを

／叫び、待つ／無垢にさらけ出す／愛を恥じて／何が人間か〉とあった。ことばの選び方にぎこちなさを感じる部分もあるが、この書き手の表現の幅の広さを感じた。

〈死にたい〉でも〈生きていたい〉でもない。ただ呼吸する。人は自分の意思とは関係なく呼吸し、心臓は動く。生きてはいるが、生の実感がない、だからといって死にたいというわけでもないという感覚がリアルなのが「胎児の唄」（前川真美）という詩だ。誰もが必ずしも能動的に生きるわけでも、死ぬわけでもないのだが、それを〈胎児〉と書いている。自己を、世の人々を突き放してみる視点がある。同じ作者の選外作「中学二年生、夏。」には〈私の存在しない世界を想像する／死体が消えた場所に／花が咲く／私の存在しない世界は／なぜかとても愛おしかった〉という連がある。ベランダの手すりを乗り越え、生にピリオドを打つ時の感覚というのは、確固たる意思で命を終えるという感じではないのかもしれない。ぼんやりと吸い込まれていくような感覚なのだろうと想像した。どちらも自己と社会とのかかわりを真摯に見つめた軌跡のみえる作品だ。

「盲目の巨人」（天海薫）は独自の展開に乏しいものの、文明批判の視点が生きているのが印象的だ。「友達と僕」（宮里うつ）は短詩だが、自己を冷静に見つめる目が社会一般の常識とされる感覚をも揺さぶってくる。

詩を書こうとすると書けないことがある。詩とはこういうものだという形にとらわれれば、自己も世界も見えなくなる。よそよそしい言葉や形式の、何も映し出さない「詩」ができてしまう。

人がどうあるべきか。どう生きるべきか、ということに向き合った作品は読み手の心を揺さぶる。人間を見つめる作品がよりよく成立するには、自己をも突き放して見ることが必要だ。突き放せば暗い部分もよく見える。闇から自己を引きずり出すことには痛みが伴う。その過程で露悪が顔を出したり、後ろ向きな考え方ややけっぱちな心境に陥ったりすることもある。それらをそのまま、自分の言葉で形にすることで詩が生まれるのだと思う。そこによそよそしい言葉や形式は顔を出さない。

読むことで自己を省みることを強いられ、痛みを伴うような作品は書く側も痛みを乗り越えて（痛みと共に生きて）いる。そういうことを感じられるいくつかの作品と出会えたことは、とても幸いだ。

（みやぎ　たかひろ／外部選考委員・山之口貘賞受賞詩人）

びぶりお文学賞選評

追われながら

西原　裕美

二十九篇の応募があった。全てを読み終わった後、今回の選考会では時間がかかるのではないかと思った。なぜなら、個人的な意見ではあるが、突出して惹きつけられる作品が少なかった為である。その中で、一定の書く力がある作品や、真摯に自分の表現を行おうとしている作品を選出した。

正賞『胎児の唄』（前川真美）について

一遍の全体的な流れや、最後の描き方が良い。シンプルにただ真っ直ぐに、しかし詩的な表現を忘れずに描いていると思う。胎児のように「死にたい」「生きたい」という意思を持たずにいることが詩からわかる。日向や日陰、好きや嫌い、晴れや雨のように、体験するさまざまな景色を感じ、さまざまな感情の中でもしかしたら生活しているのかもしれない。あるいは、そのような事さえも感じたくないのかもしれない。胎児と表現するのは、主体性を持っていないのか、あるいは「音の流れないイヤホンを耳に」すると描いているのは主体性さえも押し殺したいのか。この詩を読んで、生きることは自分の意志ではないと伝えたくなる痛みとも言えない無を作りだ

そうとする感覚を想像する。最後の連で主体がイヤホンを耳にして「胎児となる」と終結するのは見事だと感じた。

佳作『獣』（葬ヤマメ）について

清く正しく美しく描かれるような恋愛観ではなく、人間らしい渇望を書いているように思った。書く内容だけでなく、視覚的に見せる工夫もされている。言葉にも勢いがあり、激しい書き心地も伝わってくる。

佳作『カルテ』（網取汐音）について

やりとりの中に見える建前と、自分自身の本音とが良い息遣いで書かれている。また、その本音が「迫る空の痛みに満ちた青を。」というような、感じられた感覚を自分の言葉で表現しようとしている。

佳作『盲目の巨人』（天海薫）

良くなろうとすることが、実は良くない方に働きかけていることがある。そんな自分自身や社会のことも振り返りたくなる作品。いつの間にか自分自身も盲目の巨人になっていないかとハッとさせられる。

佳作『友達と僕』（宮里うつ）について

自分自身の体験した特別な苦労や感覚について詩を書こうとする人が多い。しかし、そうではなく、等身大の自分自身で素直な感覚を書いており、現代社会においてこのような感覚を持っている人の方が多いのではないかと思った。自分自身を最初に書き出すのではなく、最後の展開と

して書いている事で、読後の余韻を残している。

不思議なのは、言葉はどうやっても確かに人には伝わらないものだということだ。詩の中でよく使われるような「愛」「恋」「嬉しい」「悲しい」「夏」「雪」「黒」「青」など、それぞれの言葉は漫然と伝わるが、確かには伝わらない。私の思う「愛」は読者の思う「愛」ではないし、私の想像する「青」は、読者の思う「青」とは色の深さや濃さは違うかもしれない。伝えているつもりでも伝わらないことを追求するのに詩があるとしたら、安易に言葉は使えないと思う。伝わらなさを補うために、必死に言葉を重ねるとくどくなって伝わらない事もある。だからと言って、安易にまとめてしまったら薄っぺらくなってしまう。

きっと今回応募してきてくれた人は、書くことからは逃れられなくて、伝えたいことや、伝えたいものが無くても溢れてしまう。そんな風な、何らかのものが形となって応募してくれたのだと思う。しかし、自分の言葉を安易に使っていないか、何度も読んで推敲してほしい。

「詩は逃げても逃げても追ってきます」と尊敬する方に言われたことがある。二十歳の時にその言葉をもらっても意味がわかっていなかったし、未だに分かっているとは思わないが、少しだけ分かってきたように思う。きっと皆さんが逃げても詩は追ってくる。

来年は、選考を担当することは出来ないが、皆さんが追われながらも必死になって作った作品を一読者として読みたいと思う。

（にしはら　ゆみ／外部選考委員・山之口貘賞受賞詩人）

第十五回琉球大学びぶりお文学賞　選考経過

【募集期間】令和三年六月一日～十月二十九日
【応募総数】小説部門＝九編　詩部門＝二十九編
【応募者所属内訳】
小説部門　琉球大学＝五編（人文社会学部＝一編、国際地域創造学部＝二編、理学部＝一編、医学部＝一編）、沖縄国際大学＝四編
詩部門　琉球大学＝二十五編（人文社会学部＝六編、国際地域創造学部＝四編、教育学部＝三編、理学部＝四編、農学部＝四編、人文社会科学研究科＝三編、農学研究科＝一編）、沖縄国際大学＝四編
【応募者学年内訳】
小説部門　二年次＝三編、三年次＝二編、四年次＝四編
詩部門　一年次＝二編、二年次＝四編、三年次＝八編、四年次＝十一編、大学院＝四編
【選考会議】
小説部門
開催日　令和三年十二月二日（木）
選考委員　西森和広（国際地域創造学部教授）、高瀬裕人（教育学部講師）、村上陽子（沖縄国際大学総合文化学部准教授）

詩部門

開催日　令和三年十二月三日（金）

選考委員　宮城隆尋（山之口貘賞受賞詩人）、西原裕美（山之口貘賞受賞詩人）

第15回琉球大学びぶりお文学賞

作品募集

締切：2021年10月29日（金）必着　発表：2021年12月上旬予定

【応募要領】

1.ジャンルは小説・詩の2部門とし、両部門の重複応募を認める。
2.日本語で書かれた未発表作品に限る。同人誌・インターネットなどで発表したものは選考の対象外とする。
3.応募資格
・沖縄県内に本部が所在する大学・大学院大学・短期大学・高等専門学校に在学する学部学生（高等専門学校の場合は、本科4年次以上）及び大学院生とする。
・過去のびぶりお文学賞において受賞作となった作品の作者は、同一部門に応募することはできない。
4.応募に際しての注意事項
・応募原稿は返却しない。
・個人情報はびぶりお文学賞に関する連絡以外には使用しない。
・入賞作品は冊子『びぶりお文学賞作品集』およびインターネットにて公開するので、これに同意できる作品に限るものとし、応募した時点で同意したものとみなす。
5.著作権の取り扱い
・入賞作品の出版及び公衆送信にかかる権利は、琉球大学に帰属するものとする。

※応募方法については、図書館ウェブサイトを必ずご確認ください。
https://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/info/news/4134/

【賞】

小説部門
受賞作1編　副賞＝図書カード10万円分
佳作数編　副賞＝1編につき図書カード5万円分

詩部門
受賞作1編　副賞＝図書カード5万円分
佳作数編　副賞＝1編につき図書カード1万円分

【選考委員】

小説部門　／　西森和広（国際地域創造学部教授）
高瀬裕人（教育学部講師）
村上陽子（沖縄国際大学准教授）

詩部門　／　宮城隆尋（山之口貘賞受賞詩人）
西原裕美（山之口貘賞受賞詩人）

【送付先および問合せ】
〒903-0214　沖縄県西原町字千原1番地
琉球大学附属図書館　サービス企画係
E-mail：tskikaku@acs.u-ryukyu.ac.jp

第十五回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

発行日　二〇二二年二月二十八日
編　集　琉球大学附属図書館
装　丁　阪田 清子（沖縄県立芸術大学准教授）
発　行　国立大学法人琉球大学
〒九〇三―〇二一四
沖縄県中頭郡西原町字千原一番地
印　刷　株式会社　近代美術

非売品　転売禁止

第 15 回
琉球大学 びぶりお文学賞

小説部門

受賞作　**かわく肌**
葬 ヤマメ（沖縄国際大学）

佳作　**邂逅 ｓｉｎｃｅ１９７２．**
二藤（沖縄国際大学）

電照菊 と「闇」
羽影 憂（琉球大学）

詩部門

受賞作　**胎児の唄**
前川 真美（琉球大学）

佳作　**獣**
葬 ヤマメ（沖縄国際大学）

カルテ
綱取 汐音（琉球大学）

盲目の巨人
天海 薫（琉球大学）

友達と僕
宮里 うつ（琉球大学）

第 15 回
琉球大学 びぶりお文学賞

小説部門

受賞作　**かわく肌**
葬 ヤマメ（沖縄国際大学）

佳作　**邂逅 ｓｉｎｃｅ１９７２．**
二藤（沖縄国際大学）

電照菊 と「闇」
羽影 憂（琉球大学）

詩部門

受賞作　**胎児の唄**
前川 真美（琉球大学）

佳作　**獣**
葬 ヤマメ（沖縄国際大学）

カルテ
綱取 汐音（琉球大学）

盲目の巨人
天海 薫（琉球大学）

友達と僕
宮里 うつ（琉球大学）